

平成 1 8 年度

独立行政法人国立博物館

東京国立博物館

実績報告書

# 目次

I	国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	
1.	日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の保存と継承の中心拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承	1
(1)	-1 適時適切な収集	1
(1)	-2 寄贈・寄託の受入れ及びその積極的活用	2
(2)	-1 収蔵品の管理・保存	3
(2)	-2 保存環境の調査研究の実施	5
(3)	-1 収蔵品の修理	6
(3)	-2 科学的な技術を取り入れた修理	7
(4)	収集・保管のための調査研究	8
2.	文化財を活用した日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の国内外への発信	11
(1)	展示の充実	11
	① 平常展	11
	② 特別展	14
	③ 展覧会広報活動の取組み	25
(2)	情報発信機能の強化	27
	① ウェブサイト等による情報の発信	27
	②-1 デジタル化の推進	28
	②-2 博物館関係資料の収集、レファレンス機能の強化	29
(3)	日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解促進	30
	① 学習機会の提供	30
	②-1 ボランティア活動の支援	35
	②-2 博物館支援者の増加	37
(4)	調査研究成果の反映	40
(5)	快適な観覧環境の提供	44
	① 観覧環境の整備プログラム等の策定	44
	② 一般来館者の満足度調査及び専門家の批判聴取	46
	③ ミュージアムショップやレストラン等館内環境の充実	47
3.	我が国におけるナショナルセンターとしての機能の強化	48
(1)	調査研究成果の発信	48
(2)	海外研究者の招聘	50
(4)	収蔵品の貸与	51
(5)	公私立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進	52
II	業務の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	53

# I. 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

## 1. 日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の保存と継承の中心的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承

### (1)-1 適時適切な収集

#### ○方針

日本を中心として広く東洋諸地域の文化の体系的陳列を目指し、絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料の中から重点的に購入する。

#### ○実績

##### 購入

・国民共有の貴重な財産として永く後世へ伝えられるべき優れた作品10件を購入した。「日本美術の流れ」展及び東洋館の展示の充実を図ることを踏まえて選定を行った。

内訳：日本 絵画1件、書跡1件、陶磁2件、漆工1件

東洋 金工1件、漆工1件、考古3件

・決算額 2億994万円



こぶ牛文装飾皿(購入)



蓮池蒔絵舍利厨子及び舍利塔(購入)

#### ○自己点検評価

##### 【良かった点、特色ある点】

購入予算は、法人化以来おおむね4億円程度で推移してきたが、18年度の購入当初予算は1億6,000万円となった。18年度は購入予算の半額近くを東洋関係の作品の購入に当て、東洋館の展示の充実を図った。

「こぶ牛文装飾皿」は、古代ペルシャの華やかな文化を伝える銀製品で展示効果が高く、また珍しい銘文を持つことから国際的にも注目されている作品である。

「蓮池蒔絵舍利厨子及び舍利塔」も、展示効果が高いだけでなく、我が国の江戸時代の工芸史を研究する上で貴重な作品である。この作品は、16年度に当館で開催した特集陳列「五十嵐派の蒔絵」で展示し、美術的・学問的価値が広く認められたもので、研究が収集につながった好例として、買取協議会でも高い評価を受けた。

年度末には、賛助会員寄付金の一部(2500万円)により追加購入を行うことができた。寄付金による購入は、国の時代には、難しかったことであり、独立行政法人の特色を生かしたものである。

##### 【見直し又は改善を要する点】

諸事業の兼ね合いから、列品購入費を大幅に抑えなければならない厳しい状況にある。質の高い文化財を確保し、更なる収蔵品の充実を図る観点から、文化庁購入品の法人への出資を要望する。

## (1)-2 寄贈・寄託の受入れ及びその積極的活用

### ○方針

平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力し、寄託品数2,400件を目標とする。

### ○実績

- ・寄贈  
71件の寄贈を受けた。  
内訳：日本 絵画1件、書跡22件、刀剣4件、歴史資料4件  
東洋 絵画6件、彫刻21件、漆工9件、考古4件
- ・寄託  
新規に94件の寄託を受けた。  
寄託総数 2,773件 うち国宝63件、重要文化財329件（目標2,400件）
- ・登録美術品  
総数 3件（絵画2件、書跡1件 すべて重要文化財）

### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

研究を積み重ねた結果、寄贈、新規寄託を滞りなく進めることができた。

- ・寄贈  
71件の寄贈を受けた。指定品は含まれていないが、展示と研究に活用できる佳品が多い。西川寧(1902～1989)筆の書跡作品20件の寄贈を受けたが、これと既に寄贈されている西川寧作品169件と合せることにより、近現代の書の陳列に一層の厚みがもたらされた。
- ・寄託  
18年度も個人収集家、社寺などに働きかけて寄託品の増加に努力した結果、94件の新規寄託があり、展示（平常展）と調査研究の充実を図ることができた。
- ・登録美術品  
登録美術品制度が始まったのは平成10年度であり、当館が登録美術品を預かるようになったのは平成17年度からである。登録美術品制度の特色の一つに、登録美術品は相続時に物納の対象として優先されるという点がある。18年度には、当館が公開契約した登録美術品4件（絵画1件、書跡3件すべて重要文化財）が、制度開始以来始めて物納の対象として認められた。財務省・文化庁にとっても初めてのことであり、当館も関係部門と協力して、その実現に努力した。4件は、すでに国所有となっており、今後、文化庁から当館に長期無償貸与される予定である。

#### 【見直し又は改善を要する点】

- ・寄託  
社寺の宝物館建設などによる引き揚げや、経済事情に伴うと推定される個人収集家の引き揚げの動きは変わっておらず、18年度は9件（うち、重文2件）の寄託品を所有者に返還した。今後も寄託品の数と質を維持していくために、より一層所有者に寄託制度を働きかけていきたい。

平成18年度新収品（事業実績統計表1頁～18頁）

寄託品（事業実績統計表48頁～50頁）

## (2)-1 収蔵品の管理・保存

### ○方針

収蔵品の適正な管理に努めるとともに、耐震対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・活用のための環境整備を図る。

- 1) 本館収蔵庫の整備計画を作成しつつ、既存収蔵庫のセキュリティ強化、環境改善の工事を実施する。
- 2) 列品存在確認作業（棚卸）を継続して計画的に実施する。
- 3) 歴史資料・和書・古写真・ガラス乾板等の旧資料部関係品を整理し、列品として編入するための作業を進める。
- 4) 収蔵品の保存と展示に関する環境について全館的視野にたつて調査研究を進め、環境データの解析・蓄積を行う。
- 5) 収蔵品の生物被害を防止するため、統合的有害生物防除管理手法の徹底を図る。
- 6) 展示場及び収蔵庫における地震対策の再検討と改善を図る。
- 7) ICタグを利用した収蔵品管理方法の開発に努める。また、収蔵品管理の基礎となる列品データベースの整理に努める。

### ○実績

#### 1) 本館収蔵庫の改善

本館地下特8収蔵庫の環境を最新の水準に高めるため、改修工事を実施した。また一部収蔵庫の鍵を改修し、セキュリティの強化を図った。

#### 2) 列品存在確認作業

18年度には、特8収蔵庫の改修に伴う作品移動の折、改修前に特8収蔵庫に納められていた作品の存在確認調査を実施した。また東洋民族資料の一部について、存在確認を実施した。

#### 3) 列品登録

18年度も歴史資料の整理作業を継続して実施している。年度末までに1,253件を列品に編入した。

#### 4) 収蔵品の保存と展示に関する環境についての調査研究と環境データの解析・蓄積

- ・ 本館地下特8収蔵庫の改修計画を検討し、温湿度管理及び空気環境管理のための実施設計に向け、基本条件を作成した。
- ・ 温湿度測定、空気環境調査を実施し、展示・保存環境の現状認識とその評価を行うためのデータの解析と蓄積を行い、改善計画を立案し、実施した。具体的には展示ケース内の環境改善のための調湿剤の追加や新たな設置、収蔵庫内のホルムアルデヒドなどの空気成分除去のための空調運転を実施した。

温湿度測定 350箇所（空調監視用センサー164点、データロガー127点、毛髪温湿度計59点）

空気環境調査 屋内外 2回（16箇所）及び解析

#### 5) 収蔵品の生物被害を防止するための統合的有害生物防除管理手法の徹底

- ・ 館内における生物生息の状況を把握するために、生物発見時の届出の徹底、計画的な生息調査を実施すると共に、代替燻蒸法の二酸化炭素燻蒸による殺虫、生活害虫駆除のための薬剤の全館的設置などを行った。生物の生息状況は区域別、種類別などによって整理するとともに、生息の状況を敷地全域の地図に逐次書き込んでいる。

特8収蔵庫内列品表面に蓄積した塵埃のクリーニング処置

生物生息調査 1回（185箇所）及び解析

二酸化炭素燻蒸 1回

#### 6) 展示場及び収蔵庫における地震対策の再検討と改善

- ・ 東洋館展示室、本館考古展示室、法隆寺宝物館展示室における展示手法に関する地震対策の見直しを行い地震対策の点検を実施し、改善の方法の内容により、現状を3段階に分類した。
- ・ 収蔵庫における地震対策  
地震対策も検討した上、改修後の特8収蔵庫に設置する収納棚の仕様を策定した。

7) I Cタグを利用した収蔵品管理方法の開発、収蔵品管理の基礎となる列品データベースの整理

- ・ 東洋民族資料3,501件のI Cタグを作成し、実験を開始した。
- ・ 館内ネット上に、列品データベース試行版を公開した。

○自己点検評価

**【良かった点、特色ある点】**

- 1) 当館の収蔵庫のなかでも、保存環境面で比較的に見劣りがしていた特8収蔵庫を改修することによって、当館の収蔵庫の全体の水準を相当程度改善した。
- 2) 改修工事に伴う作品移動時に存在確認作業を実施することにより、効率よく作業を進めることができた。
- 3) 13年度から、歴史資料と和書を整理し、列品に編入する作業を続けてきた。17年度末の未整理分（収蔵品一覧表では準歴史資料と表示）は2,866件であったが、18年度はそのうちの1,253件を編入し、作業の完了に近づくことができた。
- 4) ・ 特8収蔵庫の改修を計画するにあたり、当該収蔵庫及び参考となる周辺の収蔵庫の環境に関して、蓄積されたデータを用いて過去の履歴あるいは解析結果を確認することができたため、精度の高い環境設計を行うことができた。  
・ これまで測定を行った区域の空気環境は、文化財保存の観点から安全性を満たしていることを確認した。しかしながら、相対的に高めの数値を示す区域については、吸着や排気などによる積極的な軽減策によって、さらに高い安全性を得るための検討を行った。
- 5) 統合的有害生物防除管理手法の周知により、特別展「仏像 一木にこめられた祈り」では木彫像の害虫対策が、全館的な協力体制の下、極めて円滑に実施できた。臭化メチルを用いた燻蒸法の施工期間は1週間程度であったが、現在使用する二酸化炭素法では2～3週間必要となり、過密な特別展スケジュールにおいては、全ての点において計画的な行動が必要となる。

**【見直し又は改善を要する点】**

- 1) 当館にはなお保存環境上見劣りがする収蔵庫がある。今後も機会をとらえて収蔵庫の改修を進め、保存環境の改善を図りたい。
- 2) 従来の存在確認作業はもっぱら人力に頼る方法であり、作業能率には限界がある。現在の人的体制で効率よく存在確認作業を進めるためには、流通業界などで開発が進んでいる新しい手法の導入も視野に入れつつ、効率よい新手法を開発する必要がある。
- 6) 展示用具の見直しによって、展示手法の安全度を確認し、必要な処置がある場合のレベルを3段階に分けた。すなわち、第1段階はすぐに対応可能、第2段階が経費を伴うもの、第3段階が開発を伴うものである。18年度は第1段階に対する処置に留まっており、今後さらに改善を進捗させる必要がある。
- 7) 現在の人的体制で、収蔵品管理を効率よく進めるためには、I Cタグなどの新手法の開発と、収蔵品データベースの整備をより一層急ぐ必要がある。

各収蔵庫、展示場の温湿度（事業実績統計表5 1頁）

## (2)-2 保存環境の調査研究の実施

### ○方 針

保存カルテの作成及び空調稼働時と休止時の変化が文化財の保管状況に与える影響の調査研究を進める。

- 1) 美術、工芸、考古、歴史資料及び民族資料の保存カルテを年 500 件程度作成する。
- 2) 収蔵庫、展示室の温湿度など保存環境に関する年次報告を整備する。
- 3) 輸送中の文化財に生じる振動及び衝撃に関する計測と調査を実施する。

### ○実 績

#### 1) 保存カルテの作成（目標 500件）

1,638件のカルテを作成

— 列品貸与の点検時 817件

— 本格修理のための調査時 293件

— 応急（対症）修理の実施時 528件

#### 2) 保存環境に関する年次報告の整備

「平成 17 年度環境報告書」を作成し、温湿度状況の分布を明らかにした。また、生物生息状況及び空気環境の状況に関しても別途報告書を作成した。

#### 3) 輸送中の文化財に生じる振動及び衝撃に関する計測と調査

海外：3 回（モンテリオール、ドイツ往復）、国内：3 回（成田、奈良、滋賀）の調査を実施。

### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

1) 列品貸与の点検、本格修理のための調査、応急修理の実施等の機会を有効に利用できた。

3) 輸送中の梱包ケース内部の状態に関して、あらゆる行程の具体的な状況に関する事例が蓄積されてきており、取り扱いの注意点を科学的に明らかにすることが可能になりつつある。

#### 【見直し又は改善を要する点】

2) 問題点を容易に理解できるような様式を考案する必要があること、また整理・解析に膨大な時間を要するため、報告が遅れる点を改善する必要がある。

保存カルテ作成件数（事業実績統計表 5 2 頁）

### (3)-1 収蔵品の修理

#### ○方針

修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。

- 1) 国宝・重要文化財の中長期修理計画を策定する。(90件)
- 2) 作品の応急(対症)修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、70件程度の本格修理を実施する。
- 3) 保存修復関係資料(前年度修理実施分)のデータベース化を図る。(100件程度)

#### ○実績

- 1) 国宝・重要文化財の中長期修理計画の策定(90件)

修理計画立案のため修理対象となる候補作品を選定するため、指定・未指定品合わせて293件の作品を調査しカルテを作成した。当調査結果は、18年度以降の本格修理の検討に反映される。X線透過撮影、電子顕微鏡等科学的な調査手法も必要に応じて用いた。国宝3件、重要文化財20件の調査を行い、計画を検討した。

- 2) 作品の応急修理、劣化の予防、本格修理の実施

本格修理101件(うち、国宝1件、重文1件、重美1件、継続3件、考古相互貸借17件、九博予算継続1件)、応急(対症)修理528件(うち、国宝1件、重文2件)を実施した。

経費の内訳は東博経費 8,477万7,500円、考古相互貸借 327万3,250円である。

- 3) 保存修復関係資料のデータベース化

データベース構築のために、17年度本格修理124件の修理内容についてデジタル化を実施した。17年度実施した本格修理に関し、東京国立博物館文化財修理報告書Ⅶを刊行した。

#### ○自己点検評価

##### 【良かった点、特色ある点】

- 1) 293件の列品に関する保存状態調査を実施することにより、指定品約79件を含む約1,800件の収蔵品について長期的な修理計画の立案が可能になった。
- 2) 応急修理の積極的な取り組みにより、展示及び貸与時における作品の安全性が飛躍的に高まった。本格修理の実施により、作品の保存状態が安定すると同時に、展示・公開が可能になった。修理に対応するため、保存修復支援技術者の常駐、NPO法人「文化財保存支援機構」の修理技術者派遣等、新たな方法を試みている。
- 3) 検討のために過去のデータを実際に利用する機会が増え、作品の状態の把握に役立っている。

##### 【見直し又は改善を要する点】

- 1) 指定品の中長期修理計画は23件を作成した。指定品の多くは修理経費がかさむこと、また展覧希望や予定が多いことなどから、修理時期等について不確定要素が高く、目標件数を達成することができなかった。今後、指定品の修理計画については緊急性の高いものにできるだけ限り、より具体的な計画の作成を急ぎたい。
- 2) 応急(対症)修理の要求が多くなったため、現状の修理作業用の空間が手狭になり、必要とされる処置を十分に実施しにくい状況が生じている。作業空間の確保が必要である。

修理件数表(事業実績統計表53頁)

修理概況(事業実績統計表54頁～81頁)

文化財修理データのデータベース化件数(事業実績統計表92頁)

### (3)-2 科学的な技術を取り入れた修理

#### ○方 針

伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。

- 1) 紙本作品の繊維同定を行い、作品の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
- 2) 修理前あるいは修理中に、蛍光X線分析、X線透過撮影などの光学的調査を行い、作品の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。

#### ○実 績

- 1) 紙本作品の繊維同定、作品の材料・技術の解明及び修理指針の検討

絵画・書跡などの紙本の植物繊維の同定を26件実施した。

- 2) 光学的調査の実施、作品の材料・技術の解明及び修理指針の検討

蛍光X線分析は10件（うち絵画2件、工芸1件、考古6件、民俗1件）、X線透過撮影は55件（うち絵画3件、書跡1件、彫刻6件、日本考古43件、東洋考古2件）を実施した。

#### ○自己点検評価

##### 【良かった点、特色ある点】

科学的なデータに基づく状態の検証によって、精度の高い判断と、より具体的な修理計画の策定が可能になっている。

##### 【見直し又は改善を要する点】

科学的な手法を応用した調査件数は、現状の人的能力としては最大限のものであると考える。しかし、全体の調査件数に比較して決して十分とは言えず、今後より多くの対象について実施する必要がある。そのためには、人的体制と使用機材の整備が一層必要となる。

#### (4) 収集・保管のための調査研究

##### ○方針

・中期計画、年度計画に従い、日本・東洋の文化財に関して、収蔵品とそれに関係する美術史学・考古学・歴史学などの調査研究、また、それらの文化財に関する保存科学に関する調査研究を中心に、計画的かつ持続性のあるものとして実施する。特に重要テーマについては特別調査を実施する。また、調査研究の実施にあたっては、外部研究者を積極的に招聘し研究の向上と充実を図る。また、科学研究費補助金など外部資金の活用を積極的に進める。

##### ○実績

①収蔵品及びそれに関係する以下の文化財の調査研究を実施した。

###### 1) 法隆寺献納宝物特別調査（第28次）—「聖徳太子絵伝」（第2回）—（一部は科学研究費補助金）

昭和54年度から続いている法隆寺献納宝物の多角的な調査研究の第28次。平成17～20年度は、聖徳太子の事績を描いた日本最古の遺品である「聖徳太子絵伝」（もと法隆寺絵殿の障子絵）をテーマとし、従来どおり外部研究者を招聘して共同研究を行った。昨年度同様、科学研究費補助金（基盤研究（A））による「法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝の調査研究」とリンクさせて、その制作について、本紙（立涌文綾）、彩色など、彩作当初（1069年）の姿がどのようなものであったかを、肉眼観察及び科学的な分析により、前年度の第1,2面に続き、第3,4面を精査し、後補部分の判別を行った。また、関係作品として、制作年代が近い東寺伝来の「山水屏風」（京都国立博物館蔵）を精査した。

###### 2) 特別調査「古写経」（第2回、第3回）

17年度に引き続き古写経90点の作品（手鑑のように1件の作品の中に複数の調査対象の資料があるため、件数ではなく点数を表記する）について、外部研究者を招聘して、各経典の形状、奥書、書写年代、訓点、紙質などを共同で調査研究した。

###### 3) 特別調査「金地屏風の金箔地についての調査研究」（第1回）

近年、尾形光琳の「紅白梅図屏風」（MOA美術館蔵）の金地が金箔ではなく、金泥によるものだという調査結果が話題を呼んだが、すべての研究者の賛同を得ているわけではなく、より客観的なデータの蓄積が望まれる。同じ光琳の「風神雷神図屏風」をはじめ、各派各時代の金地屏風を収蔵する当館が、同条件の下で調査を実施すれば、客観性のあるデータを蓄積することができる。18年度は、第1回目として、偏りのないデータを収集するために、調査対象とすべき金地屏風を選定し、試験的な調査を試みた。

###### 4) 応挙館障壁画の復元に関する調査研究

当館庭園にある応挙館の障壁画は、天明4年（1784）に円山応挙が描いたものである。現在、一部を修復して別途保存しているため、応挙の意図した全体構成を実見することができない。大日本印刷株式会社の特別協力を得て、応挙館の一の間、二の間の障壁画をすべて、デジタル画像処理によって複製するための調査研究を行い、その一部を完成させた。

###### 5) 館蔵狩野家模本に関する調査研究

狩野常信が模写した模本約70巻の巻物に関する調査研究。17年度に引き続き、狩野常信が模本作成時に書き込んだ所蔵者の情報の解読を進めた。江戸時代の大家系図を収載した『寛政重修諸家譜』とのつき合わせを行い、模写時に原本を所有していた大名の名前を具体的に特定していく作業を行った。

###### 6) 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究

当館所蔵の古漢籍・古洋書について、書誌データを収集して目録作成を行い、また、蔵書印を通して伝来を明らかにし、その歴史的な価値についても調査研究する。18年度はまず調査研究の体制を整え、古洋書の書誌学的研究の第一人者である松田清京都大学教授を客員研究員として迎えて本格的に調査を始めた。

<p><b>7) 東京国立博物館所蔵博物図譜データベースの調査研究（研究成果公開促進費補助金）</b></p> <p>当館には江戸時代末から明治時代前期頃に制作された 70 件 400 冊の博物図譜が所蔵されている。本研究はそれらの画像について、図の名称、産地、日付、方言、画家などの注記を調査確認し、データベース化するものである。これまでに、岩崎灌園『本草図譜』78 冊をはじめ、博物局時代に編集された『博物館禽譜』『農作物・果樹類図』『博物館写生図』『博物館獣譜』などをデータベース化した。</p>
<p><b>8) 日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究（科学研究費補助金）</b></p> <p>日本彫刻の中心的存在である木彫像について、実地目視調査と科学的調査を行い、使用された木材の樹種の同定を試みて日本彫刻における樹種選択の意義を追及した。最終年度に当たり、これまでの調査研究の総括を行い、研究成果を幅広く国民に還元するために、関連作品を一堂に会した展覧会（特別展「仏像 一木にこめられた祈り」（10月3日～12月3日）を開催した。</p>
<p><b>9) 江戸幕府旧蔵資料の総合的研究（科学研究費補助金）</b></p> <p>江戸幕府が紅葉山御文庫、昌平坂学問所、医学館、和学講談所、開成所などに収蔵していた数万冊に及ぶ図書、美術品、歴史資料等の総合的研究。現在、国立公文書館、宮内庁、国会図書館、東京大学、当館などに分蔵されている資料群について調査研究した。当館が草創期に所蔵していた江戸幕府旧蔵資料のリストを作成し、資料の成立、伝来、相互の関連などを明らかにした。</p>
<p><b>10) 「日本古代手工業史における埴輪生産構造の変遷と技術移転からみた古墳時代政治史の研究」（科学研究費）</b></p> <p>九州・近畿・東海地方の主要古墳出土資料の悉皆的な分析・分類を行い、製作技術と使用工具の比較研究を行うための資料化（写真撮影・調書作成）による記録化を図った。また、古墳時代中期古墳の基準資料である当館及び群馬県伊勢崎市・宮崎県立西都原考古博物館所蔵の群馬県赤堀茶臼山古墳・宮崎県西都原 169 号墳出土埴輪の整理・分析及び資料化を進めた。</p>
<p><b>11) 文化財の恒久的保存と持続的公開を具現化する博物館トータルケアシステムの構築</b></p> <p>文化財を収蔵し日々保護に努めている博物館という施設において、文化財の保存と活用（展示）を如何に実践するかは基本的で重要なテーマである。博物館における保存は医療における臨床分野と共通することから、臨床保存とすることができる。この問題について、内外の研究者を招聘し、国際シンポジウム「博物館における保存学の実践と展望－臨床保存学と 21 世紀の博物館－」（6月1日）を実施した。</p>
<p><b>12) ガンダーラの仏教寺院の伽藍配置と遺物に関する研究</b></p> <p>17 年度 2～3 月に実施したパキスタン国での遺物調査について、当館の研究誌『MUSEUM』606 号（18 年 2 月）にその成果の一部を発表するとともに、同研究に関する最終報告書の刊行の資料の整理を含む調査研究を行った。</p>
<p><b>13) 耐震性の高い展示手法に関する研究</b></p> <p>考古・工芸分野の器物の展示手法を中心に、地震による転倒などについて、安全性の確認と見直しを、東洋館、平成館考古展示室、法隆寺宝物館の展示について実施した。見直しの結果、それぞれの展示を、①現状の器具で今すぐ実施できるレベル、②新たな機器を製作して対応するレベル、③対策そのものを開発するレベルに分類し、①及び②については可能なものから実施した。</p>
<p><b>14) 環境保存に関する研究</b></p> <p>ホルムアルデヒドなどのアルデヒド類、酢酸などの有機酸や大気汚染物質である窒素酸化物などに関して、博物館内の空気成分の調査研究を実施し、測定箇所に関しては空気成分は比較的良好な状態にあり、危険性が低いことが確認した。また、湿度調節装置 RK2 の能力評価と使用方法の最適化についてさまざまな実験を行い、平成館大型展示ケースの相対湿度調節に関する研究（ガラスバウ・ハーン社及び販売代理店アクタス社との共同）を実施した。</p>

②客員研究員と次の13テーマに関して共同研究を実施した。

(1) 田辺龍太（財団法人 切手の博物館学芸員）「当館所蔵の切手に関する調査研究」

- (2) 水上嘉代子（財団法人 遠山記念館学芸員）「当館所蔵近世日本染織に関する研究」
- (3) 大脇潔（近畿大学 文芸学部教授）「飛鳥から奈良時代の都城・寺院の調査研究、飛鳥から奈良時代の造瓦技術の研究」
- (4) 金子浩昌（元早稲田大学講師）「当館所蔵原始・古代骨角製品に関する研究」
- (5) 安藤廣道（慶應義塾大学文学部助教授）「当館所蔵の日本考古資料に関する研究」
- (6) 東野治之（奈良大学文学部教授）「法隆寺献納宝物「古今日録抄」に関する研究」
- (7) 針谷武志（別府大学文学部助教授）「法隆寺献納宝物「聖徳太子絵伝下貼文書」に関する研究」
- (8) 片山まび（大阪市立東洋陶磁美術館学芸員）「当館所蔵の朝鮮陶磁に関する研究」
- (9) 小笠原小枝（日本女子大学家政学部教授）「当館所蔵のインド更紗に関する研究」
- (10) 松田清（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）「当館所蔵の洋書及び関連資料の調査研究」
- (11) 宮下佐江子（古代オリエント博物館）「西アジア古代ガラスの研究」
- (12) 沢田正昭（国士舘大学 21世紀アジア学部教授）「金銅製考古遺物の保存と修理の研究」
- (13) 小野博（美術刀剣研磨技師）「刀剣コレクションに関する保存状態の評価と保存修理の対策」

③科学研究費補助金により次の7件の調査研究を実施した。

- (1) 基盤研究 (A) 「法隆寺献納宝物「聖徳太子絵伝」の研究」(研究代表者 松原茂)
- (2) 基盤研究 (B) 「日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究」(研究代表者 金子啓明)
- (3) 基盤研究 (B) 「江戸幕府旧蔵資料の総合的研究」(研究代表者 高橋裕次)
- (4) 基盤研究 (B) 「日本古代手工業史における埴輪生産構造の変遷と技術移転からみた古墳時代政治史の研究」(研究代表者 古谷毅)
- (5) 東京国立博物館所蔵博物図譜データベース(研究成果公開促進費(データベース)、研究代表者 高橋裕次)
- (6) 東京国立博物館所蔵写真資料データベース(研究成果公開促進費(データベース)、研究代表者 富田淳)
- (7) 東京国立博物館所蔵古地図データベース(研究成果公開促進費(データベース)、研究代表者 田良島哲)

## ○自己点検評価

### 【良かった点、特色ある点】

- 1) 収蔵品の調査研究に関しては、17年度に引き続き、18年度も着実に成果を上げることができた。特に「法隆寺献納宝物特別調査」は18年度で28年目となる。長期にわたり、そのテーマごとに外部研究者を招聘して調査研究を継続することは重要なことであり、本特別調査の成果は着実に蓄積が進んでいるといえる。また、本研究は、同一テーマの科学研究費助成金を得ており、今後の研究充実が期待できる。特に東京文化財研究所の保存科学分野の研究者と共同研究を進めることは、文化財に関する科学的手法を用いた調査研究を推進する上で大きな意味がある。このほか、特別調査「古写経」、さらに歴史資料関係の調査の進展も評価すべきものがある。
- 2) 「日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究」は、科学研究費補助金を有効に活用した10年以上に及ぶ当館研究員の長年の調査研究であり、その成果を、最終年度に特別展という形で一般に発表できたことは、博物館における調査研究の一つの在り方を示すものと思われる。
- 3) 文化財を保有する博物館における日々の文化財保護の問題は基本的かつ重要なテーマである。新しく臨床保存という考え方を踏まえて、内外の研究者を招聘し、国際シンポジウム「博物館における保存学の実践と展望ー臨床保存学と21世紀の博物館ー」を実施したことにより大きな成果を得ることができた。

### 【見直し又は改善を要する点】

- 1) 科学研究費補助金に関して、18年度の新規採択は教育分野の基盤研究1件のみであり、美術史・歴史分野に関しては研究成果公開促進費3件のみであった。博物館における調査研究を、さらに充実したものとするためには、科学研究費をはじめとする外部研究費に関して、より積極的に応募し、研究費の充実を図る必要がある。

調査研究テーマ一覧（事業実績統計表93～94頁）

科学研究費補助金による調査研究（事業実績統計表97頁）

客員研究員一覧（事業実績統計表98頁）

## 2. 文化財を活用した日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の国内外への発信

### (1) 展示の充実

#### ① 平常展

##### ○方針

展観事業の中核と位置づけ、特集陳列等の充実を図る。また、作品キャプションについては全てに英語訳を付するとともに、時代背景等をわかりやすく伝えるために展示テーマごとの解説の充実を図り、その外国語訳に努める。

ア 定期的な陳列替の実施（年 200 回程度）

イ 陳列総件数 約 6,000 件

ウ 東洋館平常展のリニューアルを検討する。

エ 本館「日本美術の流れ」をはじめとする日本美術関係の展示、平成館の日本考古展示の更なる充実を図る。

##### ○実績

○総入館者数 1,417,195人（平常展361,773人 特別展1,055,422人）\*

\*「マーオリ 楽園の神々」展は平常料金のため、平常展の入館者数に計上する。

##### ○平常展

開館期間 18年4月1日～平成19年3月31日（309日間、平常展のみの開催期間97日間）

陳列品総件数 7,283件（うち国宝132件、重要文化財691件）

陳列替回数 延べ308回

入場料金 一般420（210）円、大学生130（70）円、高校生以下、満65歳以上無料

料金改定 一般600（500）円、大学生400（300）円、高校生以下、満70歳以上無料

※（ ）内は20人以上の団体料金

#### 1) 時代・テーマ展示「日本美術の流れ」、東洋美術・考古、考古、法隆寺献納宝物

ジャンル別展示 本館において、近代美術・近代工芸・彫刻・金工・陶磁・漆工・刀剣・民族資料・歴史資料

①「日本美術の流れ」では縄文時代から江戸時代までの日本美術を13のテーマによる展示で構成し、浮世絵は4週間に一度、ほかの絵画や書跡は6週間に一度という頻度で展示替を行い、より多くの作品を鑑賞していただいた。

② 各作品の解説札を作成し、陳列作品の理解を深める努力をしているが、外国からの観覧者のために英文解説の増加に努めている。

③ また、近年担当研究者を知りたいという要望があり、昨年より、顔の見える展示ということで、展示室に展示原案作成を担当した研究員、陳列に携わる研究者名を表示している。

④ 本館17室にあらたに、「保存と修理」の展示コーナーを設けた。当館は、博物館の使命である「保存と活用」の実践を行っており、当館の業務の柱である「保存と修理」をご理解いただくため毎年「東京国立博物館コレクションの保存と修理」の特集陳列を行ってきた。これとは別に、この「保存と修理」のコーナーを設け、修理前、修理後の作品や修理道具の陳列、さらに環境保存や文化財の現状点検の大切さをパネル展示した。これによって、来館者に修理の大切さと、文化財の保存と活用が密接に結びついているということを示すための陳列を常時ご覧に入れることが可能となった。

※本年度からは、展示室における担当研究者名の表示に加えて、当館の各研究者の研究・展示などの業績を、当館第二ウェブサイト（東京国立博物館情報アーカイブス）で紹介をしている。

#### 2) 特集陳列等 全70件

特集陳列は本館・東洋館を中心に70件を数えた。分野を越えてひとつの切り口から迫ったもの、特定の分野にしばってより深く迫ったもの、日頃展示される機会の少ない収蔵品に焦点をあてたものなど多様な活動となっ

た。その例としては

①展示される機会の少ない作品の活用

没後百年 林忠正コレクション ポール・ルヌアール展は、収集者であるパリを拠点に活躍した美術商林忠正(1853～1906)の遺族から帝室博物館へ寄贈されたルヌアール(19世紀に雑誌の挿絵で必要とされた時事的・報道的作品で人気を博した画家)作品を一堂に公開した。当館のルヌアールコレクションは、世界でも稀な、まとまったルヌアール作品で、今回は没後100年を記念して、通常の展示の中では活かしきれない作品を展示することが実現した。

②東京国立博物館と関わりの深い作品の特集

「歴史資料」では明治初年からの長い歴史を持つ館の特性を活かして、その豊富にして多様な資料と作品とを組合せながら、『日本の博物学』シリーズ「医学—医学館旧蔵資料を中心に—」、「内国勸業博覧会の工芸」「上野公園の130年」など常に斬新な切り口での特集を展開した。

佐竹本三十六歌仙絵では、歌仙絵の白眉である佐竹本に加えて部分の拡大写真、切断前の佐竹本の卷子模本、佐竹本に連なる各種歌仙絵、近世の歌仙絵粉本なども陳列して、佐竹本の特長を多角的に紹介した。これは、展示担当者の研究と当館のコレクションを生かした展示である。なお、佐竹本が切断されたのは御殿山にあった益田鈍翁の屋敷で、現在東京国立博物館に寄贈されている応挙館であった。

③柔軟な陳列の対応

「東洋の名品 唐物」は、今回「東山御物」の最高の格式をもつ梁楷の三幅対、すなわち出山釈迦図(中尊)とし雪景山水図(脇幅)が国宝室に展示されるのに合わせて、特集陳列を隣接する本館特別第1室で開催し、東山御物を中心に東洋美術の名品を展示した。特集陳列と国宝室を併せた展示を実現し、柔軟にお客様に喜んでもらえる展示とすることができた。

④新収蔵品の活用

わが国篆刻界を代表する作家・研究者の一人、小林斗盦氏(日本芸術院会員・2004年文化勲章授章)が、平成14年・15年にかけて寄贈された中国古銅印譜・日中近人印譜の特集である「小林斗盦氏寄贈中国印譜」、昨年度購入したインド細密画を抜粋した「インド細密画」などは、近年の新収品の活用である。

⑤「博物館に初もうで」19年1月2日～1月28日

新春特別展示「亥と一富士二鷹三茄子」、新春特集陳列「吉祥」を開催した。また、併催事業として獅子舞・和太鼓演奏・江戸の遊芸・生け花飾り等のイベントを実施し、寛永寺との連携事業として、寛永寺根本中堂の特別拝観を行った。

⑥親と子のギャラリー

- ・「プライスコレクション 若沖と江戸絵画展—あなたならどう見る? ジャパニーズ・アート」  
7月4日～8月27日
- ・「博物館の動物園」7月4日～9月3日

3) 特別公開 1回

- ・「特別公開 国宝・天寿国繡帳と聖徳太子像」(18年3月14日～4月9日)

○文化庁関係企画

①平成18年新指定国宝・重要文化財 4月25日～5月7日 本館特1室・特2室

展示件数：42件(うち国宝2件、重要文化財40件)ほか写真パネル展示7件

②文化庁購入文化財展「新たな国民のたから」 8月8日～9月3日 本館特1室・特2室

展示件数：19件(うち国宝2件、重要文化財13件、重要美術品1件)

○自己点検評価

【良かった点、特色ある点】

1)・平常展における時代展示とテーマ展示を組み合わせた展示である「日本美術の流れ」では、縄文時代から江

戸時代までの日本美術を「わかりやすく、親しみやすい」をコンセプトとして展示を行っている。この取り組みが定着し、「東京国立博物館が親しみやすくなった」という評価が定着してきている。

本館1階における「彫刻」「陶磁」「漆」「刀剣」などのジャンル別展示では、時代別展示としての「日本美術の流れ」では活用しきれない東京国立博物館の収蔵品を、それぞれにテーマをもって展開することで、より深く各ジャンルのものを知りたい、鑑賞したいという観覧者からの強い要望に応えている。東洋美術を本館で陳列することにより、東洋と日本の美術の関係、東洋美術の愛好の歴史といった観点を紹介することができた。また、これによって、東洋美術を展示する東洋館の存在を多くの方に再認識してもらった。

- ・東京国立博物館の収蔵品および寄託品を活用し、文化財の保存も考慮して、数多くの作品を観覧に供することができよう努めた。「日本美術の流れ」では平均8回程度の陳列替を行い、新収蔵品や新たな寄託品なども活用し、いつ来館されても常に新しい陳列をご覧頂くことが出来、リニューアル後において年とともに改善する平常展を実現した。

2)・特集陳列では、東京国立博物館の収蔵品・寄託作品を中心に、研究者が今考えているテーマ、新たに購入した作品を活用するテーマで展示を行った。

- ・多様な特集陳列を数多く提供することができ、従来の平常展では活用しがたかった、より多くの収蔵品や寄託品を活用できた。さらに、この「平常展」は、研究者の日ごろの成果を反映するとともに、その内容も子供向きのもの、購入品の活用など幅広いものであり、独立行政法人に衣替えして以来、親しまれる東京国立博物館の活動を象徴するものであった。
- ・「博物館に初もうで」は、14年度にこの事業を開始して4回目を数え新春の総合企画として定着し、本年は特別展の開始とも重なったため、多くの来館者数を記録した。家族連れをはじめ、若年層から年配層まで、幅広い層に対して博物館に親しむ機会を提供し、博物館の普及広報に大きな役割を果たしている。

### 【見直し又は改善を要する点】

1)・時代・テーマ展示「日本美術の流れ」では、国宝・重要文化財に代表される名品が数多く展示されている。さらに特集陳列では楽しい展示、あるいは深い内容を持つ展示、新たな所蔵品・寄託品の展示に努めている。しかしながら、「東京国立博物館の平常展に来れば、いつも良い作品と出会える。いつも、楽しめる」という認識が、いまだ定着するに至っていない。今後も「見にいきたくなる」広報と展示を心がけ、「東京国立博物館の平常展」を「いつ行っても楽しめる。満足できる」という評価を受けるものにまで高めていく必要がある。現状の考古展示が平成館開館以来続いており、新たな見直しの時期となっている。一般の方の考古への関心をより取り入れたもの、あるいは現在展示されていない考古作品の活用について検討する必要がある。

・平常展では作品解説を増加させるとともに、英文による作品解説の増加を目指してきた。現時点では、日本語の解説を英語に翻訳するという事に留まっていた。

今年度は、日本美術に対する理解を深め、鑑賞を助けるための英文解説はどうあるべきかを考え、来年度の4月1日からはより分かりやすさを考慮した英文パンフレットを提供する予定である。続けて、中国語・韓国語についての改定を考え、さらに、日本語のパンフレットを利用者の立場を考慮した改訂を目指すべく、検討を継続する。

- ・特別展と平常展との連携、あるいは特別展の無い時期に魅力的な特集陳列を展開するといった点を考慮した陳列を心がけているが、より長期的な視野に立って、特別展との役割分担を考慮した効果的な運営が必要である。
- ・本館リニューアルによって作品を見るための環境は大きく改善されたが、国宝室ほかでその効果が明らかとなった低反射フィルムの導入を毎年拡大し、環境の改善を図っているが、さらに問題点のある陳列場については、来年以降においてもより鑑賞のしやすい環境を作る必要がある。
- ・今まで東京国立博物館に来たことのない多くの人にその存在を広め、すでに来館した人にも年に平常展に何

度も行きたい、という気持ちを持っていただけるようにするため、各研究者が国民のニーズにあった特集陳列、東京国立博物館にふさわしい展示、魅力ある展示につとめる必要がある。

- ・以上のことを実現するために、研究員は所蔵作品を中心とした調査・研究の蓄積が重要である。加えて、展示・広報・教育といった分野も含めた各専門分野での研究の蓄積をし、収蔵品の保存と活用に一層努めることが必要である。

入館者数・入場料収入（事業実績統計表100～102頁）

展示テーマ毎にその時代背景等を説明した外国語パネル等の設置（事業実績統計表103頁）

平常展・特別展（事業実績統計表104～112頁）

## ② 特別展

### ○方針

#### 1) 特別展（自主企画展・共催展）

- ①研究者の積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。
- ②国内外の博物館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。
- ③企画実施に際し、外部の大学等の研究者の意見を広く聴取し、積極的に専門的情報を収集し、学術水準の向上に寄与する。
- ④入場者に対し、アンケート調査を実施し、その結果を分析し、展覧会に反映させる。

#### 2) 海外交流展の実施

### ○実績

○特別展総入館者数 112万8,142人（目標 48万人）

※各展覧会の詳細については、後ページの各展覧会の実績に記述。

#### 1) 特別展（自主企画展・共催展） 6回

- ① 天台宗開宗1200年記念特別展「最澄と天台の国宝」（18年3月28日～5月7日）
- ② 「プライスコレクション 若沖と江戸絵画展」（7月4日～8月27日）
- ③ 「仏像 一木にこめられた祈り」（10月3日～12月3日）
- ④ 日中国交正常化35周年・日本中国文化交流協会創立50周年記念「悠久の美 中国国家博物館名品展」（19年1月2日～2月25日）
- ⑤ 「ニュージーランド国立博物館 テ・パパ・トンガレワ名品展 マーオリ―楽園の神々―」（19年1月23日～3月18日）
- ⑥ 特別展「レオナルド・ダ・ヴィンチ―天才の実像」（19年3月20日～6月17日）

#### 2) 海外交流展 3回

- ① ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワ「日本文化の輝き―東京国立博物館名宝展」（会場：ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワ 18年3月4日～5月14日）
- ② 中日書法珍品展（会場：上海博物館 18年3月13日～4月23日）
- ③ カナダ ポワンタ・カリエール モントリオール考古歴史博物館「日本展」（会場：ポワンタカリエール モントリオール考古歴史博物館 5月16日～10月15日）

## ○自己点検評価

### 【良かった点、特色ある点】

1) 特別展等においては、対象とした時代、地域、分野とも多岐にわたることから、内容的に変化に富み、かつ高い水準の展覧会を開催することができた。特に「仏像 一木にこめられた祈り」展は、館員の10年来の研究成果を十分に活かしたもので、木彫像の素晴らしさに対する賞賛や、日本文化の再認識につながったという好評が多数寄せられた。

展示方法においては、展覧会の趣旨、内容、目的、そして良好な鑑賞環境の確保のため、様々な工夫を凝らし、展示作品の魅力を十分に引き出せるよう配慮した。中でも、「プライスコレクション 若冲と江戸絵画展」では、光の違いによって屏風絵がどのように異なって見えるのかといった、鑑賞の場の変化による見え方の相違を示すため、照度が自動的に変化する照明装置を設定するなど、かつてない斬新な試みを行い、大きな反響を呼ぶとともに、その成果により、日本展示学会賞第3期<2006-2008年>候補に推薦されている。また、解説、音声ガイド等、分かりやすく、鑑賞の助けとなる情報の提供を心掛けた。さらに、主要な作品解説に英訳を添えるなど、国際化に対応し、外国人の観覧者の満足度が向上するように努めた。

これらの取り組みの結果、アンケート調査によれば、いずれの展覧会においてもほぼ8割の入館者から好評を得ることができた。

2) オセアニア、アジア、カナダという世界の異なる地域で多彩な内容の展覧会を開催し、日本文化及び東京国立博物館の紹介に大きな役割を果たした。

### 【見直し又は改善を要する点】

1) ・予想を大きく上回る入館者があり、多くの人々に作品の魅力を伝えることができたが、反面会場の混雑により、良好な鑑賞環境の確保という点では課題を残した。分かりやすい動線、十分な休憩場所の確保等、今後も一層の努力を続ける必要がある。

・解説パネル等については、展示に対する理解の助けとなるよう、できる限り大きくし、平易な表現を心がけたが、アンケート等によれば、なお「見づらい」「分かりにくい」という声が寄せられた。今後も分かりやすい文章表現、視認性の向上等、研究を重ねていく必要がある。

・共催展の開催に際し、昨今のマスコミ等の厳しい財政状況を反映して、共催者から運営経費の節減を求める声が一層強まってきている。経費の効率化は、時に展覧会の水準の維持と相反する要素があるため、十分な検討が必要であり、経費と労力の分担のあり方等、共催展の運営面に関する全般的な再点検と新たなルール作りに向けて、共催者を含めた関係各方面との協議を引き続き行いたい。

・昨今の国際化への対応として、展覧会出品作品の個別解説に英文表記の増加を図ったが、今後も、英語を中心に、外国語表記が充実していくよう、引き続き取り組んでいきたい。

・特別展等の実施に際しては、他の日常業務との兼ね合い等を十分に調整していく必要がある。そのため、業務分担等について検討を加え、特別展の業務が特定の時期に特定の研究員の過重な負担にならないよう、より一層の計画性をもって事業計画を立てる必要がある。

## 天台宗開宗 1200 年記念特別展「最澄と天台の国宝」(共催展)



### ○方針

天台宗開宗 1200 年を記念して、比叡山・延暦寺をはじめとする全国の天台宗関係寺院に伝わる代表的な文化財を一堂に展覧し、天台の多彩な仏教美術の世界を示す。

#### 1) 開会期間

18 年 3 月 28 日～5 月 7 日 (37 日間)

#### 2) 会場 平成館 特別展示室第 1 室～4 室

#### 3) 主催 東京国立博物館、天台宗、比叡山延暦寺、読売新聞東京本社

#### 4) 陳列品総件数 168 件(うち国宝34件、重要文化財99件)

#### 5) 入館者数 21万3,104人(目標10万人)

#### 6) 料金 一般1,300円 大学・高校生900円 小・中学生400円

#### 7) 担当 島谷弘幸展示課長ほか4人

#### 8) アンケート結果 満足度 79.9%

### 展覧会の内容

総本山比叡山延暦寺をはじめ、天台宗関係寺院に伝わる宝物を一堂に展示し、法華経信仰、阿弥陀浄土信仰から密教、山王神道にまでいたる天台の幅広い信仰が育んだ美の世界を紹介した。いくつもの本尊仏を寺外で初めて公開するなど、これまでにない充実した内容であった。



### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

- ・天台宗関係寺院に伝わる代表的な宝物を一堂に展覧する魅力が十分に伝わり、予想を大きく上回る観客動員があった。またアンケートの結果でも高い満足度が得られた。
- ・照明が作品の魅力を引き出していた点が評価された。
- ・広報活動を早い段階から行い、またポスター、ちらしのデザインが好評で、展覧会の広報が十分に浸透した。また、記者発表会を開催することにより、より効果的な広報を展開することができた。
- ・事前調査及び企画段階から京都国立博物館との連携を図り、質的な向上を果たすことができた。

#### 【見直し又は改善を要する点】

- ・アンケート結果によれば、「混雑していて展示が見えなかった」「順路が分かりづらかった」という声が多数寄せられており、予想を超える混雑に会場レイアウトが対応できていなかった点は反省点としてあげられる。
- ・観客が会場の仕切り幕を壁と勘違いし、寄りかかろうとして転倒する事故が起きた。会場の設計については、一層の注意が必要である。
- ・ケース移動に際して、業者の作業に問題があり、ケースに不具合が生じた。施工管理の在り方に課題を残した。

## プライスコレクション「若冲と江戸絵画」展（共催展）



### ○方針

アメリカ・カリフォルニア州のエツコ&ジョー・プライスコレクションは、魅力に満ちた江戸時代絵画の収集で世界的に知られている。個性的な魅力に富んだ作品群を紹介し、併せてコレクターの作品に対するまなざしに迫る。

#### 1) 開会期間

7月4日～8月27日（49日間）

#### 2) 会場 平成館 特別展示室第1室～4室

#### 3) 主催 東京国立博物館、日本経済新聞社

#### 4) 陳列品総件数 101件

#### 5) 入館者数 31万7,712人(目標10万人)

#### 6) 入場料金 一般1,300円 大学・高校生900円 小中学生以下無料

#### 7) 担当 田沢裕賀教育講座室長ほか2人

#### 8) アンケート結果 満足度 83.1%

### 展覧会の内容

伊藤若冲の作品を中心とした個性的な江戸絵画の収集で知られるアメリカ・カリフォルニア州のエツコ&ジョー・プライスコレクションの中から、日本では初公開となる作品を含む101点を展示した。50年以上にわたるコレクションにはプライス氏の一貫した感性がうかがわれる。本展では、コレクターの作品に対するまなざしを読み解き、プライス氏の視線を観客が体験することを目指し、第4室ではガラスケースを用いず、光の効果に工夫を凝らす新しい試みを行った。



### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

- ・「光と絵画の表情」のコーナーにおける照明を変化させる試みは、多くの観客に受け入れられ、好評を博した。事前の周到な準備が、斬新な展示効果に結びついた。
- ・30代を中心とする比較的若い世代の入館者が多かったことが収穫であった。若年層にアピールする企画や広報展開について、多くのヒントが得られた。
- ・若冲をはじめとする江戸絵画の魅力と日本文化の保護に対する関心を喚起することができた。

#### 【見直し又は改善を要する点】

- ・アンケート結果によれば、会場内の混雑により展示が見にくかったという意見や、休憩スペースが少なすぎるという意見が少なからず寄せられており、鑑賞環境の改善により一層の努力が必要である。

## 「仏像 一木にこめられた祈り」(共催展)



### ○方針

一本の木から仏像を彫りだす一木彫刻は、奈良時代に成立し、平安時代の鈍彫像、そして江戸時代の円空、木喰へと日本独自の展開をみせた。民衆の信仰と深く結びつきながら、脈々と生き続けた一木彫像の歴史をたどる。

#### 1) 開会期間

10月3日～12月3日(54日間)

#### 2) 会場 平成館 特別展示室第1室～4室

#### 3) 主催 東京国立博物館、読売新聞社

#### 4) 陳列品総件数 65件(146軀) うち国宝4件、重要文化財36件

#### 5) 入館者数 33万5,489人(目標15万人)

#### 6) 入場料金 一般1,500円 大学・高校生900円 小中学生以下無料

#### 7) 担当 岩佐光晴情報課長ほか2人

#### 8) アンケート結果 満足度 82.3%

### 展覧会の内容

仏像は、仏教とともに中国から朝鮮半島を経て日本に伝わって以来、外来の影響を受けながらも、日本の風土や文化的な伝統によって変容し独自の展開を遂げた。インドにおける檀像彫刻の流れを受け、像の大半を一本の木から彫り出す一木彫が数多く制作されるようになり、以後仏像を木にこめられた祈りの造形として捉える精神は脈々と受け継がれ、江戸時代の遊行僧である円空、木喰の仏像へと至った。本展では、日本の木の文化の象徴ともいえる一木彫の仏像彫刻を一堂に展示した。



### ○自己点検評価

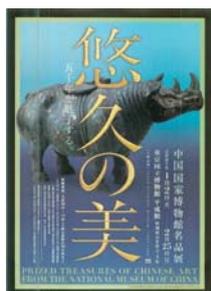
#### 【良かった点、特色ある点】

- ・一木彫の展開を通観するという展覧会のテーマが明確であり、展示デザイン、広報、図録等と有機的に結びついて、強いメッセージを送ることができた。その結果、多くの観客に好意的に受け入れられ、入場者数、図録販売数は当初の予想を大きく上回った。
- ・照明効果について事前に周到的な実験、準備を行うことにより、作品の魅力を引き出す十分な効果が得られた。
- ・共催者以外のマスコミの対応も極めて好意的であった。展覧会の質の高さによるものと思われる。

#### 【見直し又は改善を要する点】

- ・会場の混雑に対応するため、当初予定になかったパーティションを設置しなければならない箇所が生じた。露出展示作品の安全性の確保については、事前に十分に検討しておく必要がある。
- ・キャプションや解説の掲出位置が適切とはいえない部分があった。会場レイアウトの設計に際し、サインやグラフィックの位置についても事前に詳細な検討を加えておく必要性を改めて感じた。

## 「悠久の美 中国国家博物館名品展」(共催展)



### ○方針

日中国交回復 35 周年、日本中国文化交流協会創立 50 周年を記念し、中国を代表する博物館の一つである中国国家博物館の収蔵品の中から、新石器時代から五代に焦点を絞り、数多くの著名な作品を含む考古遺物の優品を一堂に展観する。

#### 1) 開催期間

19年1月2日～2月25日(47日間)

#### 2) 会場 平成館 特別展示室第3室～4室

#### 3) 主催 東京国立博物館、日本中国文化交流協会、朝日新聞社、中国国家博物館

#### 4) 陳列品総件数 61件

#### 5) 入館者数 9万8,133人(目標8万人)

#### 6) 入場料 一般1,300円 大学生800円 高校生700円 中学生以下無料

#### 7) 担当 谷豊信列品課長、ほか3人

#### 8) アンケート結果 満足度 77.3%

### 展覧会の内容

中国国家博物館は、中国歴史博物館と中国革命博物館が2003年に統合して生まれた文字通り中国を代表する博物館であり、中国各地の出土品から重要作品を集め、中国の歴史と美術を内外の観覧者に紹介している。

本展は中国国家博物館の収蔵品の中から、特に美術的価値の高い名品 61 件を厳選したものである。新石器時代中期から五代まで(紀元前 4000 年頃から 10 世紀まで)、出土地は 16 の省・市にまたがる。5000 年にわたる悠久の時間の中で培われた、広大な中国各地の様々な文化財を紹介した。

### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

- ・ 中国国家博物館の収蔵品のなかから選りすぐりの名品を、じっくりと鑑賞していただくことができた。
- ・ 作品の鑑賞環境を重視したディスプレイが行われ、作品の魅力を引き出すうえで効果があった。
- ・ 中国側との協力態勢により、図録や会場の解説パネルについても入念な準備ができ、観覧者へ適切な情報を提供することができた。

#### 【見直し又は改善を要する点】

- ・ 展示作品の質が高かったにもかかわらず、観覧者数があまり増えなかった。展覧会の魅力をわかりやすく効果的に伝えるという点で課題を残した。
- ・ 出品作品件数が少ないという声も少なからず寄せられた。少数精鋭による名品をゆったりと鑑賞していただくという主催者側の意図に対する説明に不十分な点があったと考えられる。展覧会の趣旨説明のあり方を検討する必要がある。
- ・ 中国国内での作品の輸送について、日本側の目が十分に行き届かないところもあり、作品の保全の観点から不安が残った。今後は、作品の保全について、より一層緊密な協力態勢を構築できるよう、中国側の共催者と事前に十分な協議を行う必要がある。

## ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワ名品展「マーオリ―楽園の神々―」（自主企画展）



### ○方針

ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワの収蔵品を中心に、ニュージーランド原住民マーオリの祖先の宝物を展覧し、マーオリの物質文化と精神文化とを紹介する。

#### 1) 開会期間

19年1月23日～3月18日(48日間)

#### 2) 会場 平成館 特別展示室第1室～2室

#### 3) 主催 東京国立博物館、ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワ

#### 4) 陳列品総件数 121件

#### 5) 入館者数 7万2,720人(目標5万人)

#### 6) 入場料金 平常展料金

#### 7) 担当 白井克也平常展室主任研究員ほか2人

#### 8) アンケート結果 満足度85.2%

### 展覧会の内容

ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワの所蔵する名品121件を通じて、ニュージーランドの先住民であるマーオリ人の伝統文化の全体像を紹介する。

### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

- ・ 日本人にとってなじみの薄いマーオリの文化を紹介する展覧会であったが、ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワとの協力に基づいた周到な準備により、マーオリ文化の紹介に成果を挙げることができた。特に、会場の数箇所では放映した映像資料は、マーオリ文化の包括的な理解に有効であり、また、さまざまなイベントの実施やマーオリをテーマとした映画の上映等も、マーオリ文化への関心を高めるうえで効果があった。
- ・ 展示デザインについて、当館のデザイナーが事前に現地に赴いて綿密な協議を行ったことにより、効果的なディスプレイが実現し、またその後の業務がスムーズに進行した。ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワが製作した展示具は製作技術水準の高いものであり、大いに参考になった。

#### 【見直し又は改善を要する点】

- ・ ニュージーランド側が国際展や日本の事情に不案内であったため、通関等の手続きのうえでいくつかの問題が発生した。また、先方から当館に対し、予期せぬ要望がいくつか寄せられ、それに対してどの程度まで応じたらよいか、予算的な問題も含め、苦慮する点が多々見受けられた。国際展の場合、事前の協議をいっそう綿密に行う必要を感じた。
- ・ 展覧会広報に対して民間企業からの助成を得ることができ、広報面で充実を図ることができたが、共催展に比較するとなお広範な広報活動を展開するまでには至らず、自主企画展における展覧会の周知という点で課題が残った。

## 「レオナルド・ダ・ヴィンチ—天才の実像」(共催展)



### ○方針

レオナルド・ダ・ヴィンチの傑作として知られる「受胎告知」を中心に、芸術と科学の広範囲にわたるレオナルド・ダ・ヴィンチの活動を紹介します。

#### 1) 開会期間

19年3月20日～6月17日(79日間)

#### 2) 会場

本館特別5室、平成館特別展示室

#### 3) 主催

「イタリアの春2007」実行委員会、東京国立博物館、朝日新聞社、NHK、NHKプロモーション

#### 4) 陳列品総件数

101件

#### 5) 入館者数

10万6,229人(19.3.31現在)(目標50万人)

#### 6) 入場料金

一般1,500円 大学生1,200円 高校生900円 中学生以下無料

#### 7) 担当

井上洋一教育普及課長ほか1人

#### 8) アンケート結果

(会期中)

### 展覧会の内容

イタリアが誇る至宝であり、レオナルド・ダ・ヴィンチの傑作「受胎告知」を公開する。さらに、模型や映像などを用いて、芸術と科学にわたるレオナルド・ダ・ヴィンチの広範な試みを紹介する。

### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

19年度が主たる事業期間になるため、総括は19年度実績報告で行う。

#### 【見直し又は改善を要する点】

19年度が主たる事業期間になるため、総括は19年度実績報告で行う。

## 「日本文化の輝き—東京国立博物館名宝展」(海外交流展)

### ○方針

ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワにおいて、東京国立博物館所蔵品による展覧会を開催し、縄文時代から江戸時代までの日本の芸術文化の歴史を紹介するとともに、両国の文化交流の一助とする。

- 1) 開会期間 18年3月4日～5月14日(72日間)
- 2) 会場 ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワ
- 3) 主催 東京国立博物館、ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワ
- 4) 陳列品総件数 131件(うち国宝4件、重要文化財7件)
- 5) 入館者数 1万7,707人
- 6) 入場料金 無料
- 7) 担当 原田一敏上席研究員 ほか2人

### 展覧会の内容

縄文時代から江戸時代までの日本の芸術文化の歴史を、「1. 日本文化のあけぼの」「2. 祈り」「3. 武家の装い」「4. 教養—文学・茶の湯・能—」「5. 江戸の生活文化」の5部構成により、東京国立博物館所蔵の優品131件で概観した。

### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

考古・祈り・武家の装い・教養—文学・茶の湯・能—・江戸の文化という5つのテーマに分けて展示を構成し、日本文化に初めて触れる方にも分かりやすいように工夫を凝らした。ニュージーランドでは初めての本格的な日本美術展ということから、大きな反響を呼んだ。

#### 【見直し又は改善を要する点】

会場の広さの制約により、屏風の前に十分な空間を設けることができなかった。また、ケースのアクリルが展示作業中に破損する事故が生じた(作品が損傷することはなかった)。展示ケースや演示具など、展示作業に関する事前の打ち合わせにやや不十分な部分があったことが反省点としてあげられる。

## 「中日書法珍品展」(海外交流展)

### ○方針

日本と中国の歴代の書の名品を一堂に会し、中国の書の影響を受けながらも独自の展開を示す日本の書と中国の書との関係などを対比的に捉え、芸術的な価値を展観する。

- 1) 開会期間 18年3月13日～4月23日(42日間)
- 2) 会場 上海博物館(中国)
- 3) 主催 上海博物館、東京国立博物館、朝日新聞社
- 4) 陳列品総件数 103件(うち国宝18件、重要文化財10件)
- 5) 入館者数 14万6,252人
- 6) 入場料金 大人:20元
- 7) 担当 島谷弘幸展示課長 ほか1人

### 展覧会の内容

中国の書と、その影響を受けながら独自の世界を築いてきた日本の書に対比的に展示し、書の歴史や展開を概観するとともに、両国の書の名品を通じて、書芸術の素晴らしさを広く紹介した。

### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

「喪乱帖」が1300年ぶりに里帰りを果たすと同時に、日本の書が本格的に中国で紹介された画期的な展覧会であった。中国内で大きな反響を呼び、多くの来館者に日中両国の書の素晴らしさを紹介することができた。また、展覧会に関連して国際シンポジウムが開催され、日本側からは名和陽明文庫長、島谷展示課長ほかが発表を行い、また、富田列品室長、鍋島書道博物館研究員が『上海文博』誌上に研究成果を発表した。展覧会の内容についても、こうした外部機関の研究者と密接な連携・協力を行うことにより、質的にも高い水準のものを実現することができた。

#### 【見直し又は改善を要する点】

上海博物館の展示会場において、巻物を逆方向から見ざるを得ない箇所が生じ、鑑賞に支障をきたしたところがあった。海外展における会場のレイアウトについては、事前に一層綿密な検討を行なうようにしたい。また、撤収作業時に作品の後補部分の一部が破損する事故が起きた。諸条件の異なる海外での展示・撤収作業にあたっては、より一層の注意を払い、万全を期すようにしたい。

## 「日本」 JAPON (海外交流展)

### ○方針

日本の原始・古代文化を、東京国立博物館の所蔵品を中心に、93 件の優品で紹介する。

#### 1) 開会期間

5月16日～10月15日(153日間)

2) 会場 ポワンタカリエール モントリオール考古歴史博物館(カナダ)

3) 主催 東京国立博物館、ポワンタカリエール モントリオール考古歴史博物館

4) 陳列品総件数 93件(うち国宝1件、重要文化財18件)

5) 入館者数 17万1,005人

6) 入場料金 無料

7) 担当 望月幹夫文化財部上席研究員ほか2人

### 展覧会の内容

日本の原始・古代文化を、東京国立博物館の所蔵品を中心に、93 件の優品で紹介した。展示は時代順に、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代に分けて行った。

ポワンタカリエール モントリオール考古歴史博物館では、近年、世界各地の古代文化を紹介する展覧会を毎年1回開催しており、その一環としての開催であった。

### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

カナダにおいて日本の考古遺物の優品をまとめて紹介する初の機会となった。展覧会は好評を博し、当該館としては異例なほど多数の17万1,000人という入場者を迎えた。

#### 【見直し又は改善を要する点】

展覧会終了後、カナダから日本への輸送中に埴輪猪(重文)の一部が破損する事故があった。海外展の梱包・方法については、今後より一層研究を重ね、万全を期すようにしたい。

### ③ 展覧会広報活動の取組み

#### ○方針

- ・企画ごとに、ターゲットに応じた広報計画を立案し、多様な媒体を使った広報活動を展開する。
- ・広報誌・ウェブサイトなどの自主媒体及びマスコミ媒体を使って、平常展の情報発信を積極的に行う。

#### ○実績

- 1) 「東京国立博物館ニュース」第677～682号（発行回数 6回 発行部数 各3万部）
  - ・入館者への無料配布、定期郵送のサービス（年間6冊 1,000円：送料と事務費購読者負担）を継続。
  - ・平常展重視の編集方針を継続。
  - ・博物館の活動について伝える連載「博物館の舞台裏」記事の連載を継続。

- 2) ウェブサイトによる情報提供

更新約3,000回

保存と修復に関する展示新設に伴うページの新設

利便性の向上を目的としたマイナー・チェンジの実施

（トップページのリンク増設、メニューバーの改良など）

- 3) 広報・宣伝制作物の企画・制作・配布等

各特別展・お正月企画に伴うポスター・チラシ

一例として「博物館に初もうで」（19年1月2日～1月28日）

チラシ 日本語：9万部 英語：1万部 ポスター B1:120部、B2：1,600部

ポスター・チラシDM発送：1,400件

交通広告：JR、東京メトロ、京成 上野駅ほか主要駅

- 4) 「東京国立博物館 展示と催しのご案内」年間スケジュールリーフレットの制作・配付 8万部

- 5) 「東京国立博物館パンフレット」（日・英・独・仏・中・韓・西）

「東京国立博物館 展示と催しのご案内」（年間スケジュールパンフレット）

「本館フロアガイド」（日・英・韓・中）

「東洋館フロアガイド」（日・英・韓・中）

「法隆寺宝物館」案内パンフレット 増刷

- 6) マスコミ媒体と連携した広報活動の展開

- ・17年度に引き続き、「月刊うえの」「月刊書道界」等の連載ページを確保し、マスコミ媒体との連携による平常展の広報を行った。

#### プレスリリースの送付

A 定期情報 月1回 マスコミ230媒体に送付

B 教育普及、イベント、ボランティア、留学生 の募集などの単独プレスリリース 10回

C 特別展関連のプレスリリース 10回

#### マスコミ対応

取材・撮影・写真貸し出し等 のべ322件

#### 掲載（新聞・雑誌・インターネット等）

A 掲載総数 145件

B 定期刊行物における連載ページの確保（無料告知欄）

- ・「月刊展覧会ガイド」、「月刊書道会」、「月刊うえの」等
- ・「につぽにあ」（12ヶ国語による外務省広報誌）

C 海外からの来館者誘致のための有料広告掲載

- ・「JAPAN NOW」（年1回発行 英語による観光客向け情報誌）に1ページ広告を掲載

7) 電子メールマガジンの配信

- ・送信回数 58回
- ・利用登録者数 1万5,138人

8) モバイルサイト簡易版を試制作・公開について検討中

○自己点検評価

**【良かった点、特色ある点】**

- ・広報誌、ウェブサイト、メールマガジンなどを使って最新の情報を滞りなく配信することができた。
- ・お正月企画「博物館に初もうで」において、ちらしボックス付のポスター掲出を増やし、英字新聞への元旦広告の掲載を行うなど、より効果的な広報を模索しながら新たな取り組みを行ったことにより、多くの方々に周知を図ることができ、一定以上の入館者数を確保することにつながった。
- ・マスコミ各社へ定期的かつ密に情報を提供することにより、特別展のみならず平常展や東京国立博物館について、様々な媒体に掲載、紹介される機会が多く見られた。

**【見直し又は改善を要する点】**

- ・今後は、媒体担当者と、より緊密な情報交換を行い、情報掲載の促進を図っていきたい。
- ・イベントについては、広報活動をより計画的に行う必要がある。それにより、一層の周知・集客に努めていきたい。

平常展・特別展（事業実績統計表 112～120頁）

広報刊行物一覧（事業実績統計表 125頁）

## (2) 情報発信機能の強化

### ① ウェブサイト等による情報の発信

#### ○方針

情報の的確な整理と迅速な更新により、常に分かりやすくかつ最新の情報を提供する。

#### ○実績

ウェブサイトのアクセス件数：368万28件

#### ○自己点検評価

##### 【良かった点、特色ある点】

- ・情報の更新回数が約3,000回を数え、展示替えや展覧会企画等、事項ごとに、迅速かつきめ細かい情報の提供に努めた。
- ・内容をより充実しつつ見やすいものするため、ウェブサイトのマイナー・チェンジを実施した。
- ・ウェブサイトへのアクセス件数が一定以上の水準で推移するとともに、ウェブサイトの内容等について、特に海外から好評の意見が多数寄せられた。

##### 【見直し又は改善を要する点】

- ・文字の大きさや展覧会情報の一部について、なお不備を指摘する声があった。今後とも一層の改善に取り組んでいきたい。
- ・携帯電話端末用ウェブサイトに関しては、引き続き、実施に向け検討を続けたい。

ウェブアクセス件数（事業実績統計表128頁）

## ②-1 デジタル化の推進

### ○方針

文化財の画像情報のデジタル化及び基本情報のデータ化を行い、ウェブサイト等で積極的に公開する。

### ○実績

- 1) 収蔵品等の写真の高精細デジタル化を継続的に実施した。本年度はカラーフィルム等に加えて、歴史資料等を収録したマイクロフィルムのデジタル化に着手した。  
収蔵品等のデジタル化件数 画像4,472件、文字50万字
- 2) 収蔵品の重要文化財11件について、高精細デジタル画像の作成を行った。
- 3) 目録等の収蔵品に関する基本情報のデータ化を実施した。
- 4) 法隆寺献納宝物デジタルアーカイブを引き続き公開した。

### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

- ・ 既存カラーフィルムの遡及デジタル化がほぼ完了し、撮影からデジタル化に至る手順について、日常的な方法を確立することができた。
- ・ マイクロフィルムなど、これまで対象にできなかった媒体についても、デジタル化に着手した。

#### 【見直し又は改善を要する点】

- ・ 豊富なデジタル画像の蓄積を生かすために効果的な検索・利用システムの構築が急務である。
- ・ 収蔵品等のデジタル化件数が大幅に目標値を下回っているが、これは自己収入予定額の増加により、事業費を抑制したため、デジタル化経費を最小限に抑えたためである。

収蔵品デジタル化件数（事業実績統計表 128頁）

## ②-2 博物館関係資料の収集、レファレンス機能の強化

### ○方針

- ・美術図書等の収集を行い、研究者、一般、入館者へ広く閲覧の場を提供する。
- ・資料館の閲覧業務・図書整理業務の一括外注化に伴い、従来の業務体制を見直し、業務の効率化を図りつつ、レファレンスサービスの向上に努める。

### ○実績

- 1) 収蔵品・出品作品等の写真資料の登録を進めた。(カラー4,466枚、モノクロ6枚)
- 2) 図書館システムの導入に伴い、既存の図書データ約13万件および雑誌データ約5,000件をNACSIS-CAT(国立情報学研究所(NII)が提供する目録・所在情報サービス)に対応するシステムに移行し、整理業務への運用を開始した。19年度実施予定のweb-opac(インターネットでの蔵書検索システム)公開に向けて、移行データの整備を進めた。また、遡及バーコードラベルの貼付作業を開始した。
- 3) 法隆寺宝物館において、観覧者向け図書コーナーのサービスを継続実施した。
- 4) 図書資料の収集は、寄贈においては当館に収蔵されていない図書であることを条件に受け入れ、購入においては当館に本来あるべきで収蔵されていないものを優先的に選定するという方針の下に進めた。日本考古学会より受け入れた寄贈図書の和雑誌6,027冊、洋雑誌394冊について、880冊の製本を実施した。
- 5) 資料館の有効利用へ向けて、VRシアター開設のための検討を凸版印刷と進めた。
- 6) レファレンス業務の円滑な遂行に役立たせることを目的に、レファレンス記録の入力を開始した。

### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

- ・図書館システムの導入に伴い、各種関連データの整備を進め、図書整理業務への運用を開始したことで、図書検索の利便性が向上した。
- ・遡及バーコード貼付作業を進めることによって、今後の図書利用をより円滑にし、業務の効率化を図ることができるようになった。
- ・資料館の閲覧業務・図書整理業務の外注化に伴い、業務がスムーズに移行できるよう、業者に対する指導に努めた。

#### 【見直し又は改善を要する点】

- ・閲覧業務における文化財情報のレファレンスに関しては、館内外の情報の収集につとめ、委託業者への指導を継続して行う必要がある。
- ・図書館システムに含まれる多様な機能を有効に運用していくため、既存データの整備を継続して行ってきたい。また、このシステムを活用した貸出の運用を平成19年度に開始する予定としている。

情報資料の収集(事業実績統計表128頁)

特別観覧件数(事業実績統計表129頁)

### (3) 日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解促進

#### ①学習機会の提供

##### ○方針

日本の歴史・伝統文化及び東洋文化の理解促進に努める。

- ①ナショナルセンターとしての先導的教育普及事業のモデル化と実践に努める。
- ②教員との対話を重視しながら学校との連携をさらに強化する。
- ③参加者のニーズや時宜を得た様々な魅力ある講演会・講座を実施し、幅広い層の参加者に文化財についての理解を深める機会を提供する。
- ④東京芸術大学との連携事業に関しては、来館者に対するサービスの向上のための、模造制作の成果展示・ギャラリートークを行うことで、学生の学習意欲を喚起し、博物館事業及び文化財等についての理解を深める機会を提供する。
- ⑤キャンパスメンバーズ（大学会員制度）の内容をより充実させ、大学との連携強化を図る。

##### ○実績

#### ①学習機会の提供

##### 1) ナショナルセンターとしてふさわしい教育普及事業

###### ●「親と子のギャラリー」2回（2テーマ）

###### ①「プライスコレクション 若冲と江戸絵画 ―あなたならどう見る？ジャパニーズ・アート」

会期：7月4日～8月27日（開館日：49日間）

参加者数：7万6,517人 担当研究員数 3人

内容：特別展「プライスコレクション 若冲と江戸絵画」に合わせ、所蔵者ジョー・プライス氏より8点の江戸絵画をお借りして展示した。展示を見た上で来館者独自の鑑賞姿勢を確立してほしいという願いから、展示、セルフガイド配布、鑑賞ツールやハンズ・オン体験コーナーの設置といった多角的なアプローチを通して、「近寄って見る」「想像して見る」「体感して見る」「知って見る」という4つの絵画鑑賞方法を提案した。



鑑賞ツール使用中



畳に座り作品鑑賞しながら解説シートを読む

###### ②「博物館の動物園」

会期：7月4日～9月3日（開館日：55日間）

参加者数：7万1,726人（本館総入場者数） 担当研究員数 3人

内容：本館14室で行われた特集陳列「動物」に合わせ、「博物館の動物園」というセルフガイドを制作し、会場で配布した。動物をかたどった工芸作品を集めた特集陳列を、より身近に、分かりやすく楽しんでもらうために、セルフガイドに加えて会場内で簡単なスケッチをしてハガキをつくるワークショップも展開した。

###### ●インターンシップ

全国18大学から18人のインターンを受入れた。 担当研究員数 10人

特別展室・平常展室・教育普及室・デザイン室・情報管理室を対象に18大学からインターンの受入れを行った。

●児童・生徒を対象とした美術体験学習 154回（4テーマ）

体験学習を主体としたワークショップを展開し、児童・生徒のみならず親や一般の来館者の参加を得た。

プログラム名	実施日	参加者数	担当研究員数
①ハンズ・オン体験コーナー「いろいろな結末」「屏風をあれこれ」「絵具は何でできているの？」（申込不要）	7月4日～8月27日	7万6,517人 （総入場者数）	3人
②「家族で参加 あなたもコレクター」（事前申込制）	7月30日・8月11日	49人	3人
③「オリジナル絵葉書をつくらう！」（申込不要）	7月4日～9月3日	2,373人	3人
④「マーオリのデザイン」（申込不要）	1月23日～3月18日	1万8,273人 （総入場者数）	3人

作品鑑賞の手助けとなるよう、視覚のみならず、触る・つくる・対話をするといった体験的要素を多く盛り込んだワークショップを用意した。



「家族で参加 あなたもコレクター」制作風景



同左 完成作品とともに

2) 学校との連携事業

●東博スクールプログラム（鑑賞支援・就業体験）の実施

（小学校6校、262人 / 中学校59校、656人 / 高校21校、530人 / 中高一貫1校、132人 計1,580人）

総合的な学習の時間等に対応し、小・中・高校生の授業の見学受入れプログラム用パンフレットを作成し、東京都内・近隣県の小・中・高校に送付。児童・生徒の来館時には、展示室内での作品ガイド、就業体験、複製作品取扱い体験など多彩なコースを用意し好評を得た。



スクールプログラム実施風景

●高等学校との連携教育実施

（8月4日、9月30日、10月21日、11月18日、12月22日 計5回 11人 担当研究員3人）

実際に博物館を訪れて体験学習をする単位制のプログラム。「博物館を内側、外側から見る」をテーマに、内容は鑑賞、取扱い体験、ボランティア活動体験、保存修復をテーマとした展示鑑賞、博物館の裏側探検

など多岐に渡った。

●全国高等学校美術・工芸教育研究会との連携事業の実施（共催：東京藝術大学）

（7月26日～28日 39人 担当研究員3人）

第3回を数えた「博物館・芸大研修『日本の美、伝統と技』」の博物館研修部分は、企画段階から協同で内容を練り、今年度は「日本の絵画～歴史と鑑賞～」をテーマに安土桃山から江戸の絵画を取り上げ、講義と作品鑑賞を行った。また、参加教員による授業の実践発表も行われた。

●全国歴史教育研究協議会（日本史・世界史）との連携事業の実施

（10月26日 教員30人 生徒3人 担当研究員3人）

東京国立博物館の所蔵品を用いた授業を、生徒を招いて実施し、さらに授業案を発表するという新たな試みを行った。

●教員内見会の実施（「プライスコレクション 若冲と江戸絵画展」 7月8日 359人、「仏像 一木にこめられた祈り」 10月7日 532人、「マーオリ 楽園の神々」「悠久の美」 1月27日 74人、いずれも担当研究員3人）

特別展の観覧、展示内容の解説、指導要領と関連した授業提案資料の配布という内容で、多くの参加を得た。

●大学生及び教育関連機関等の見学対応 21件（大学8件、 210人 / 教育関連機関等13件、 357人、計567人、担当研究員3人）

### 3・4) 講座・講演会等の実施

●講演会 30回（参加者総数 6,542人 担当研究員数 延べ68人）

①月例講演会 12回（参加者総数 1,612人 担当研究員数 延べ29人）

②テーマ講演会 4回（参加者数 958人 担当研究員数 延べ6人）

③記念講演会 11回（参加者数 3,519人 担当研究員数 延べ24人）

④座談会・その他講演会 3回（参加者総数 453人 担当研究員数 延べ7人）

●連続講座

特別展「仏像 一木にこめられた祈り」に合わせて連続講座「木彫」（10月13日～15日 担当研究者 5人、5講座）を実施した。（参加者数 325人 担当研究員数 延べ7人）

●公開講座 26回（参加者数1,113人 担当研究員数 延べ58人）

新規事業として、上野動物園と連携した講座を東京国立博物館と上野動物園の相互で実施した（「いっしょに見よう！博物館と動物園」 4日 参加者数266人）



東博での解説会風景



展示解説会風景



動物園での解説風景

考古相互貸借事業の理解を深めるために、四国埋蔵文化財普及啓発協議会と連携し、最新情報を盛り込んだ展示解説会を開催した。（9回 参加者数 217人 担当研究員数 延べ 13人）

●列品解説 41回（原則毎週火曜 参加者数3,055人 表慶館ツアーを含む）

各展示室にて担当研究員が作品に関する解説を行った。その他、12月7日に改修された表慶館を記念して、

表慶館ツアーを行った。（「表慶館修理で見えてきたもの」 参加者数116人 担当研究員数 2人）

●教育的イベント 5回

特別展・常設展	実施内容（参加者数）
①最澄と天台の国宝	「天台声明」（参加者数 1024人）
②仏像 一木にこめられた祈り	落語会（参加者数 145人）
	映画「埋もれ木」上映会3日 （参加者数 788人）

5) 東京藝術大学学生ボランティア（登録者数9人）

東京藝術大学大学院生ギャラリートーク班により、入館者に対するギャラリートークを60回（前・後期各30回）実施した。また、制作班により、特別展「仏像 一木にこめられた祈り」の同時開催「一木彫ができるまで」で展示する5躯の模造を制作し、それに関するギャラリートークを実施した。

ギャラリートーク班によるギャラリートーク 6名 前・後期各5回 参加者1,949人  
制作班によるギャラリートーク 3名 1班 8回 参加者1,294人



制作班



ギャラリートーク班

東京芸術大学学生ボランティアによるギャラリートーク

6) キャンパスメンバーズ（大学会員制度）

従来から準備を進めていたキャンパスメンバーズ制度の運用を4月より開始し、会員の学生を対象とした無料観覧の実施などのサービスを行った。

会員数 15 団体

平常展観覧人数 4,992 人

キャンパスメンバーズ加入校の学生を対象に、「博物館セミナー」として、博物館の歴史、サービス、教育普及事業等について当館の職員が実例を交えた解説を実施した。また、キャンパスメンバーズ加入校の学芸員志望学生を対象に、「教育関連事業」として、作品の取り扱いを含む博物館実務全般について演習・実習の形式により体験的講座もあわせて実施した。

博物館セミナー 6回（参加者 94名）

教育連携事業 10日間（参加者 4名）

○自己点検評価

【良かった点、特色ある点】

- 1) 親と子のギャラリーでは、アンケートから見ると、多数の来館者から、「とても面白かった」もしくは「面白かった」という好評を得た。また、鑑賞ツールやハンズ・オン体験コーナーの人気も高く、来館者自らが能動的に展示に参加できるような工夫が高い評価を得た。さらに、ワークショップにおいても、児童生徒だけでなく、多数の大人や外国人の来館者の参加をみたことなど、新しい平常展の楽しみ方を提案することができた。
- 2) 学校との連携事業では、都近隣の学校に配布した「スクールプログラム」が浸透し、参加申し込み及び実施数が昨年度より増加した。また、ボランティア研修の成果により、スクールプログラムにおいても効果

的なガイドの実施が可能となり、多くの学校に対応できるようになった。

3・4) 公開講座の一環として実施した上野動物園との連携企画では、博物館と動物園の職員が異なる場所において異なる視点から解説を行うなど、新たな鑑賞方法を提示した。また、他分野の地域の公共施設との連携や意見交換を行うきっかけとなった。

特別展関連イベントでは、展示との関連性を持たせた教育的要素を盛り込んで計画した結果、展示内容に対する関心を引き起こしたといえる。

5) 東京藝術大学学生ボランティア

a) ギャラリートークでは、前年度よりも実施日数を拡大し、より多くの学生に機会を提供した。また、館内の連携をより緊密化することにより、学生ボランティア活動に対する支援を効果的に行うことができた。

b) 制作工程模型については、特別展と同時に展示を行ったことにより、9万人を超える入場者を数え、多くの来館者に一木彫の構造理解を深めるための機会を提供することができた。

6) 懸案であったキャンパスメンバーズ制度について、運用を開始した。なお、発足後も大学等への働き掛けを行い、会員数は15団体となった。また、特別展開催にあわせて、会員に向けてポスター・チラシ等を送付し、学生の利用を喚起するように努めた。

「教育関連事業」に関しては、少人数の学生に対し、きめ細かい対応により、様々なプログラムを実施し、参加した学生に対して、東京国立博物館や博物館での仕事に対する興味や関心を喚起することができた。

7) 以上に加え、展覧会ごとのポスター、ちらしの送付など、学校に対して定期的な情報発信を行い、学生・生徒の来館を促進した。

#### 【見直し又は改善を要する点】

1) 「親と子のギャラリー」については、人数が限定される申し込み制のワークショップだけでなく、来館者がいつでも気軽に参加できる常設のワークショップや障害者にも鑑賞を楽しんでもらえる工夫を検討していきたい。

2) ボランティア研修については、さらに多様なニーズに対応できるよう、内容の一層の充実を図りたい。

3・4) 効果的な教育的イベントを行うため、設備・会場の確保等、具体的な改善方法を検討していきたい。

5) 東京藝術大学学生ボランティア

a) ギャラリートークでは、テーマの選択を学生の自由意志に委ねてきたため、本館（日本美術）に偏重する内容となった。今後は出来る限り分野が偏らないよう、適切な指導・助言を行う必要がある。

b) 制作工程模型については、事前調整に時間がかかり、制作時間が極端に短くなった。その結果、パネルなどの造作物の制作が切迫し、諸方面で支障をきたすことがあった。予算的にも当初予定を上回った。今後は、事前の計画立案と調整をより綿密に行う必要がある。

6) キャンパスメンバーズ制度については、来年度からは、学生に加え教員も平常展無料観覧の対象にするなど制度改正を行うこととしているが、関係者の意見も踏まえながら、より一層、会員大学等との連携強化を図っていく必要があると思われる。

教育普及関連事業は、参加者が想定したよりも少なかった。広報の遅れも一因として考えられるが、プログラム自体にも問題があったと思われる。問題点を十分に検討するとともに、より質の高い事業を目指すため、全館的な取り組みが不可欠である。

学習機会の提供（事業実績統計表 1 3 1 頁）

児童生徒を対象とした教育普及事業（事業実績統計表 1 3 2～1 3 3 頁）

大学等との連携（事業実績統計表 1 3 6 頁～1 3 9 頁）

講座・講演会等の開催実績（事業実績統計表 1 4 0 頁～1 4 3 頁）

ギャラリートーク実施状況（事業実績統計表 1 4 8 頁～1 4 9 頁）

## ②-1 ボランティア活動の支援

### ○方針

特別展・特集陳列の解説会への参加、ガイドツアーの企画立案等を通じて、ボランティア自身の学習機会を増やすとともに、適宜、研修を行い、ボランティアの資質の向上に努め、ボランティア活動の展開に資する。  
イベントボランティア制度を導入し、ボランティアスタッフを活用したイベントの実施を行う。

### ○実績

生涯学習ボランティア（通年 参加者数 151 人）

生涯学習ボランティアは新たに 53 名（登録期間 21 年 3 月まで）を採用し、総数 151 名でボランティア活動を実施した。

#### 1) 各種解説ツアー

- ・「樹木ツアー」「浮世絵版画展示ガイド」等の展示解説、館内案内を実施した（11 テーマ 496 回、参加者数 8842 人）。
- ・特集陳列に伴うガイドを実施。

ボランティアによるガイド



ボランティアガイドによる「桜」ツアー



- ・「古文書－歴史を語るメッセージ」・・・ガイドとワークショップを同時開催。30 日間・ガイドは 1 日 3 時間・2 人ずつで希望者に適宜対応（参加者数 544 人）
- ・「桜」ツアー・・・館内の桜（樹木）と特集陳列「桜」の展示作品を巡るツアー。7 日間（18 年度のみ。18 年度実施回数 12 回、参加者数 280 人。19 年度にまたがった事業のため通算 14 日間。）

#### 2) 各種教育普及事業の補助活動

- ・「総合的学習の時間」に向けたガイド・ツアー・実習補助等を実施（65 校、461 人に対応）
- ・その他：法隆寺宝物館資料室の閲覧業務補助、講演会・列品解説・公開講座等の実施補助、特集陳列の鑑賞及びワークショップ等の補助、外部団体との連携事業補助、作品データの入力、点字パンフレットの制作（19 年 3 月配布開始）、中学生以上向け館内ガイドマップの作成（1 回／月 平成 18 年 4 月～平成 19 年 3 月まで 8,130 部発行）、展示解説シートの作成、各種ワークシート等の作成、教育普及事業の告知補助

#### 3) ボランティア自身による自主的な企画立案

- ・「こどもアートスタジオ」を実施。  
勾玉・根付づくりを通して、児童・日本の伝統工芸への理解を深めるよう図った。（5 回）
- ・ボランティア向け研修等を実施（28 回）、特別展等解説会（4 回）を実施し、生涯学習ボランティアの資質向上や育成を図った。
- ・ボランティア自身による広報誌を作成した。（5 回）

#### 4) イベントボランティア

- ・今年度から当館で開催される様々なイベントにおいて、その運営補助等の活動をしていただけるボランティアの受け入れを開始した。（11 人）

活動実績としては、次のイベントにおいて、プログラム・チラシ等の配布物の準備、入場受付、お客様の誘導及び会場整理等で補助活動をしてもらった。

- ・ガラテア・クアルテット

- ・東京国立博物館クリスマスコンサート
- ・新春東博寄席
- ・東京国立博物館ニューイヤーコンサート

## ○自己点検評価

### 【良かった点，特色ある点】

#### 1) 各種解説ツアー

館から依頼する基本活動の充実が図られ、ボランティアが自主的に実施する各種解説ツアーにも多くの参加者があった。特に時候と特集陳列にあわせて企画した「ボランティアによる桜と作品ガイド『博物館でお花見』」では、博物館の多様な楽しみ方を来館者に紹介することができた。

#### 2) 各種教育普及事業の補助活動

特集陳列や親と子のギャラリーなど、活動の多様化や、解説ツアーや体験学習の補助活動等の経験の蓄積により、ボランティア自身の意識向上が図られるとともに、来館者に対するサービスの向上にもつながった。また、点字パンフレットを制作することにより、障害者に対するサービス向上を図った。

#### 3) ボランティア自身による自主的な企画立案

新たにボランティアによる広報誌が作成され（年間5回発行）、ボランティア相互の連絡が緊密に行われるようになった。

#### 4) イベントボランティア

各種イベント実施に際して効果的な運営補助活動を展開した。

### 【見直し又は改善を要する点】

#### 1) 各種解説ツアー

活動自体は定着化したが、年度ごとにボランティアの一部が交代することから、全体的な活動の継続性を確保しておく必要がある。

#### 2) 各種教育普及事業の補助活動

平常展・特集陳列の活性化を目指し、来館者が観覧する際に役立つような新たな活動を模索していきたい。

#### 3) ボランティア自身による自主的な企画立案

広報誌の制作以外にも、ボランティア同士または博物館との連絡調整に関する新たな仕組みを検討する必要がある。

#### 4) イベントボランティア

イベントボランティアは、イベント運営に関する補助という観点では大きな効果を上げているが、一方で活動の場が狭く、また活動時間帯も不規則であるなど、自主性が発揮されにくい環境となっているなどの課題も生じた。このため、当館のボランティア活動を包括的に実施するほうが効果的であるとの判断の下に、19年度から生涯学習ボランティア活動と統合し、生涯学習ボランティアの活動の一環として各種イベントの運営補助も行ってもらふこととする。

ボランティア受入れ実績（事業実績統計表152～154頁）

## ②-2 博物館支援者の増加

### ○方針

友の会等の会員制度の活動の活性化を図り、賛助会制度の継続・拡充、地域や企業との連携を推進する。

### ○実績

#### 1) 友の会

- ・「東京国立博物館友の会」「東京国立博物館パスポート」等の制度を活用し、リピーターの養成に努めた。
- ・10月1日の平常展料金改正に伴い、65～70歳のお客様対象の「平常展割引パス」（2,000円で年間を通じて平常展が観覧可）を新設した。

#### ① 会員数

種 別		18年度	(参考) 17年度
友の会（1万円）		1,346人	1,377人
パスポート	一般	1万7,584人	1万6,800人
	※（4,000円）	6,682人	
	（3,000円）	1万902人	
	学生	1,121人	1,089人
※（2,500円）	373人		
	（2,000円）	748人	
平常展割引パス（2,000円）		27人	—

（注）「パスポート」欄の※は、料金改正（10月1日）以降の数字

#### ② 「東京国立博物館友の会」会員を対象とした事業の実施

- ・2ヶ月に1回の割合で博物館ニュースを送付するほか、博物館で実施するイベントの案内や、館主催のコンサート等のイベントを優待価格で鑑賞できるようにする等、サービスの充実に努めた。また、人気のある館主催イベント（「東大寺講演会」、「新春東博寄席」）を優先的に案内するとともに席数中に友の会枠を設けた。
- ・賛助会会員であるクラブツーリズム（株）の協力を得て、京都国立博物館の特別展覧会「開館100周年記念 美のかけはし」の観覧を含めた旅行会を実施した。（8月24日～25日 参加者29名）

#### 2) 賛助会

前年度に引き続き、当館の運営基盤をより確かなものとするため、一般から広く寄附を仰ぐ賛助会員制度を実施した。

#### ① 会員数

	18年度	(参考) 17年度
特別会員	16団体	14団体
維持会員	維持会員22団体・個人112人	維持会員22団体・個人77人

#### ② 会員対象の特別鑑賞会等の実施 特別展内覧会 4回 事業報告会 1回

#### 3) 地域との連携

- ① 「国際博物館の日」（毎年5月18日）の記念事業として、近隣の文化施設が共同で「私の博物館 ケータイフォトコンテスト in 上野」を実施した（4月26日～5月21日）。台東区、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ、並びに上野の飲食店・商店等で構成される「上野のれん会」から、広報、ちらし（飲食店等の割引クーポン付）の作成、賞品の提供等で協力を得て実施した。

- ② 台東区との共催により「第3回台東区の伝統工芸職人展 匠のものづくり」を開催し（11月21日～26日 表

慶館)、併せて、連携する特集陳列「伝統工芸—技術記録」(本館)を実施した。

- ③財団法人台東区芸術文化財団との共催により、「歌と弦楽五重奏による こんにちは、モーツァルトさん！」を実施した。
- ④台東区観光課による「外国人向け 体験型観光ルート」に協力し、ボランティアによる展示解説などを実施した。
- ⑤台東区教育委員会と連携して、書道博物館との連携企画展示「抵抗と恭順」において、ギャラリートーク「中国17世紀の書の魅力」を企画した。
- ⑥「上野の山文化ゾーン」協議会に引き続き参加し、「上野の山文化ゾーンフェスティバル 講演会シリーズ」で講演会「未来へつなぐ考古学」(講師:当館事業部教育普及課長 井上洋一)を企画した。また、同講演会シリーズにおける文化ゾーン主催の講演会「文化遺産国際協力推進法」(講師:当館特任館長 平山郁夫)を平成館大講堂で実施した。
- ⑦「上野法人会」に引き続き入会し、会員向けに主催イベントの割引案内を行った。
- ⑧「上野のれん会」に引き続き入会し、会員を対象としたギャラリートークを開催した。また、館主催イベントの実施経費の支援を得たチラシに、「上野のれん会」の広告を掲載した。
- ⑨東京都主催の「ウェルカムカード」に引き続き参加し、外国人観光客の平常展割引を実施した。(利用者 3236人)

#### 4) 企業等との連携

- ①公共交通機関等とのタイアップによる広報の充実に努めた。
  - ②「東京美術」と提携し、同社の広告掲載のもと、館主催イベントのちらし作成経費の支援を得た。
    - ・館主催コンサートちらし 2件
    - ・「留学生の日」ちらし
  - ③賛助会会員でもある三菱商事株式会社と連携協力して、障害者向けの特別展の特別内覧会及びワークショップを実施した。
    - ・内覧会実施 3回 ワークショップ実施 1回
    - ・マーオリ展 協賛
- 自主企画展「ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワ名品展 マーオリ—楽園の神々—」の開催にあたり、協賛としてトヨタ輸送株式会社及びトヨタ海運株式会社から広報費の支援を得た。
- ④照明デザイナー石井幹子氏によるライトアップイベント「光彩時空 光と音が織りなす幻想夜景絵巻・スペシャルライトアップ+邦楽ライブ」を光彩時空実行委員会(照明デザイン実施:石井幹子デザイン事務所)との共催により実施した(10月31日~11月5日)。また、イベント期間中は全館夜間開館を実施した。  
期間中の来場者(17時以降の退館者数) 3万5,151人
  - ⑤東京地下鉄株式会社の「東京メトロ一日乗車券」に引き続き参加し、平常展割引額を実施した。(利用者 680人)
  - ⑥東京の美術館・博物館等 共通入館券実行委員会主催の「東京・ミュージアムぐるっとパス」に引き続き参加し、平常展割引を実施した。(利用者 1,761人)
  - ⑦国土交通省主催のキャンペーン事業「YOKOSO! JAPAN WEEKS 2007」へ協力し、19年1月20日~2月28日の期間について外国人の方の平常展割引を実施した。(利用者 45人)

#### ○自己点検評価

##### 【良かった点、特色ある点】

- 1)・友の会会員数はおおむね増加傾向にある。
  - ・友の会会員を対象に、館主催イベントの割引料金を設定することや予約を優先的に受け付けるなど、友の会会員に展示の鑑賞だけでなく、博物館自体を楽しんでいただけるように工夫した。人気の高いイベン

トの案内を優先的にし、席数中に友の会枠を設けることで、友の会のメリットをアピールすることができた。

・旅行会は、京都国立博物館の特別展覧会の観覧を旅程に含めることで、他の国立博物館の特別展も無料で観覧できる「友の会」会員のメリットを活かすことができ、好評であった。

- 2) 個人の維持会員数は前年度同様、大きな伸びを見せており、博物館ニュースや館内でのリーフレットの配布等の告知によりその存在が広く認識されていると思われる。また、現会員の紹介による入会など、制度定着による波及効果も見られる。
- 3) 台東区との連携においては、相互理解が深まり、お互いの資源を活かしたより質の高い事業が企画、展開できるようになってきている。
- 4) 「光彩時空 光と音が織りなす幻想夜景絵巻・スペシャルライトアップ+邦楽ライブ」は、期間中夜間開館を行い、多くのマスコミ等に取り上げられたことで博物館認知度向上が図られたとともに入館者増にも繋がった。

#### 【見直し又は改善を要する点】

- 1) ・博物館支援者のさらなる獲得を目指し、「パスポート→友の会→賛助会」のようにリピーターをより積極的な支援者へとつなげることができるよう、仕組みを検討したい。  
・旅行会においては京都国立博物館の観覧時間が足りなかったという意見が多かった。また、17年度同様、選択肢を広げるため、九州国立博物館向けの旅行会も企画したが、参加者が集まらず催行にいたらなかった。より会員のニーズを考慮した旅程を計画する必要がある。
- 2) 賛助会員については、個人をターゲットにした新規加入者の獲得は成功しているものの、法人維持会員・特別会員については厳しい状況が続いている。景気拡大のもと、企業に対する積極的なアプローチを考えていきたい。
- 3) 地域との連携事業を進めるためには、相互の資源を活かしあえる企画を、展示計画と連動させつつ早期に立てることが重要である。
- 4) 企業との連携・拡充を今後さらに推進していくためには、企業側にも魅力となるような工夫を図っていく必要があると思われる。

友の会（事業実績統計表156頁）

渉外活動（事業実績統計表157～160頁）

留学生の日（事業実績統計表173頁）

## (4) 調査研究成果の反映

### ○方針

- 1) 調査研究成果を具体的に博物館の収集、保存、展示、教育などの事業に反映させる。
- 2) 調査研究成果の公表については、外部の研究者及び研究機関とも連携協力して充実を図る。

### ○実績

#### 1) 法隆寺献納宝物・聖徳太子絵伝の調査研究（特別調査）

法隆寺献納宝物特別調査「聖徳太子絵伝の調査研究」（科学研究費）において、高精細カメラで撮影した画像や、補絹の箇所を明かにした図を、法隆寺宝物館で公開するとともに、インターネットでも公開できるシステムの検討を開始した。今後、そのシステムを整備することにより、11世紀の大画面説話絵の様相、及び当時のやまと絵の技法を明らかにするために多くの情報を一般に提供することができる。

#### 2) 古写経（特別調査）

18年度の平常展に、これまで調査した作品のうち47点の写経を活用したが、その作品解説などに調査結果を反映させた。

#### 3) 金地屏風の金箔地についての調査研究（特別調査）

まだ試験的な調査段階であるが、今後の研究成果に関しては、特別公開あるいは特集陳列などによって一般公開する予定である。また、「法隆寺献納宝物・聖徳太子絵伝の調査研究」と同様にインターネットなどにおいても公開できるよう検討する。

#### 4) 応挙館障壁画の復元に関する調査研究

大日本印刷株式会社の特別協力を得て、応挙館の一の間、二の間の障壁画をすべて、デジタル画像処理によって複製するための調査研究を行い、その成果として、その一部の複製を完成させた。今後、残りの部分の複製を完成させ、応挙館の室内空間を復元し、一般に公開する予定である。また、取り外した障壁画については、必要な修理を行い、随時、平常展等において一般公開する予定である。

#### 5) 館蔵狩野家模本に関する調査研究

江戸時代中期における諸大名による雪舟画収集の在り方や、狩野家の鑑定業務・模本作成業務の実態について知り得る重要な基礎資料の蓄積が進みつつある。この成果を踏まえて今後の平常展などに反映させたい。

#### 6) 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究

本年度は当館所蔵の古漢籍・古洋書に関して、その伝来や歴史的な価値について本格的な調査研究を開始し、新しい知見をいくつか得ることができたが、将来的には館蔵の漢籍・洋書の内容や歴史的価値を示すための特別展示を予定している。また、調査が完了した時点で図版目録を作成して一般公開する予定である。

#### 7) 東京国立博物館所蔵博物図譜データベースの調査研究（科学研究費補助金 研究成果公開促進費）

これまでの研究成果を踏まえて、特集陳列「博物図譜一写生とそのかたち」（8月22日～10月15日）を開催し、江戸の博物学者らによって描かれた動物、植物、魚類、菌類など、様々なジャンルにわたる博物図譜を展示した。日本の博物学が享保年間（1716～35）の幕府による全国産物調査を契機に体系化し、さらに西洋の博物学の影響を受けて展開した科学的研究などを紹介した。

#### 8) 日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究（科学研究費補助金）

11年度から継続して行った調査研究（科学研究費補助金）の研究成果を幅広く国民に還元することを目的として、関連作品を一堂に会した特別展「仏像 一木にこめられた祈り」（10月3日～12月3日）を開催し、そのカタログに本研究の成果を論文及び詳細な作品解説として公表した。

#### 9) 江戸幕府旧蔵資料の総合的研究（科学研究費補助金）

これまでの研究成果を踏まえて、特集陳列「医学 医学館旧蔵資料を中心に」を開催した。明治時代、博

物局が引継いだ幕府医学館の旧蔵書は約 2,000 冊（現在は当館、内閣文庫及び宮内庁書陵部に分蔵）を数えるが、展示を通して、明和 2 年(1765)、江戸幕府奥医師多紀元孝が、医学館において、医学の教育に従事する一方、古今の貴重な医書を収集、考証し、校勘、影写、出版事業などを行った業績を紹介した。

#### 10) 日本古代手工業史における埴輪生産構造の変遷と技術移転からみた古墳時代政治史の研究（科学研究費補助金）

本研究の対象とした①西都原古墳群 169 号墳出土品、②赤堀茶臼山古墳出土埴輪の調査研究を通して明らかになった成果を基礎に、①特集陳列「宮崎県西都原古墳群出土埴輪」、②特集陳列「群馬県赤堀茶臼山古墳出土埴輪」を実施した。また、赤堀茶臼山古墳・西都原 169 号墳出土埴輪に関して、当館の平常展、他機関への特別展への貸与などの活用を図ることができた。

#### 11) 文化財の恒久的保存と持続的公開を具現化する博物館トータルケアシステムの構築

国際シンポジウム「博物館における保存学の実践と展望－臨床保存学と 21 世紀の博物館－」（6 月 1 日）を実施し、その成果を当館の第 2 ウェブにシンポジウム速報として公開するとともに、来館者に対しては、本館 17 室に「保存と修理」の常設コーナーを新設し、博物館における臨床保存に関する展示を行った。

#### 12) ガンダーラの仏教寺院の伽藍配置と遺物に関する研究

平成 17 年度 2～3 月に実施したパキスタン国での遺物調査について、その成果の一部を「ザールデリー遺跡出土石彫群の復元的考察」として当館の研究誌『MUSEUM』606 号（18 年 2 月）に発表した。また、研究成果を踏まえて、今後の東洋館のガンダーラ美術の平常展示の向上に反映させる予定である。

#### 13) 耐震性の高い展示手法に関する研究

東洋館、平成館考古展示室、法隆寺宝物館の展示について、考古・工芸分野の器物の展示手法を中心に、地震による転倒などに関する安全性の確認と見直しを行った。調査研究の成果として、それぞれの展示を、①現状の器具で今すぐ実施できるレベル、②新たな機器を製作して対応するレベル、③対策そのものを開発するレベルに分類し、①及び②については可能なものから実施した。

#### 14) 環境保存に関する研究

- ①ホルムアルデヒドなどのアルデヒド類、酢酸などの有機酸や大気汚染物質である窒素酸化物などに関して、博物館内の空気成分の調査研究を実施した。年に 2 回、3 年に渡り調査の結果、測定箇所に関しては空気成分は比較的良好な状態にあり、危険性が低いことが確認された。また、収蔵庫や展示ケースなど、密閉性の高い空間における空気成分は、その中での作業者のみならず文化財にも強い影響を及ぼすので、相対的に高い値が確認された場所については、換気等の実施による改善を試みた。
- ②湿度調節装置 RK2 の能力評価と使用方法の最適化について様々な実験を行い、平成館大型展示ケースの相対湿度調節に関する研究（グラスバウ・ハーン社及び販売代理店アクタス社との共同）を行った。その成果を実際に行われた特別展に際して、本装置を使用してケース内を調湿し、作品の展示を行った結果、展示環境は極めて良好な状態に保たれ、安全な環境を維持することができた。

#### 15) 博物館美術教育に関する調査研究

- ①ツールや参加型ワークショップを利用し、体験的要素を持つ日本美術鑑賞方法に関する調査研究の成果として、特別展の関連企画として、親と子のギャラリー「プライスコレクション 若沖と江戸絵画 あなたならどう見る？ジャパニーズ・アート」を実施した。会場内で鑑賞ツールやハンズ・オン体験コーナーを設置し、7 万人以上の参加者を得た。
- ②地域他機関との連携を通して、日本美術鑑賞への新しい切り口に関する調査研究の関連事業として、「いっしょに見よう！博物館と動物園」と題し、当館の「親と子のギャラリー」展示会場と上野動物園の両方で、博物館と動物園の研究者が合同ギャラリートークを行い、新規来館者の開拓を図った。
- ③博物館美術教育の先駆的モデルケースの開発研究の試みとして、東京藝術大学と連携して、平常展でのギャラリートーク、特別展「仏像 一木にこめられた祈り」における製作工程模型の展示を用いてのギャラリートークを行った。

## 16) 博物館教育・普及事業の事例分析と日本の伝統文化に関する先駆的教育・普及理論の構築（科学研究費補助金）

本研究は日本及び世界の博物館・美術館で行われている先駆的な博物館教育・普及事業（広報活動を含む）の事例を網羅的に収集し、その内容を分類・分析を行うことにより、我が国特有の古美術・伝統文化への理解を深めるため独創的な博物館教育理論を構築し、その成果を、博物館が刊行する普及（広報）印刷物やワークショップ等様々なツールの組み合わせによる実践的な博物館教育・普及活動に反映させることを目的とする。18年度は、海外からの研究者を招聘しセミナーを開催したほか、九州国立博物館開館1周年記念国際シンポジウム「博物館教育の活性化へむけて～アジアの博物館教育の現場から～」の開催に協力した。

## 17) 博物館環境デザインに関する調査研究

- ①環境デザインの観点から「復興本館」及び「表慶館」に関する館史資料・建築様式・建設工法等について調査研究を行い、その研究成果を（1）親子のギャラリー「博物館ってどんなところ？ たてもの編 本館」の企画・展示デザイン、（2）列品解説「帝冠様式 ー復興本館の建築スタイルについて」、（3）表慶館改修「よみがえった明治建築」の企画・展示デザインに反映させた。
- ②平成16年度の本館「日本ギャラリー・リニューアル」から継続して行ってきた平常展の展示・環境・サイン・照明デザインが総合的に評価され、18年度日本デザイン学会年間作品賞を受賞したが、それらの展示環境デザインに関する調査研究の成果として、引き続き、展示照明手法や照明器具の開発を行い、「プライスコレクション 若沖と江戸絵画」展、「仏像」展、「マーオリ 楽園の神々」展等の特別展において、斬新な手法による展示照明を実施した。
- ③館内案内・誘導サイン、グラフィックデザインに関する調査研究を行い、表慶館改修工事に伴う新規サイン、グラフィックデザイン、本館17室「保存・修復コーナー」のサイン、グラフィックデザイン、平常展、特集陳列等への案内・誘導サイン、グラフィックデザインに反映させた。

## ○自己点検評価

### 【良かった点、特色ある点】

- (1) 「法隆寺献納宝物・聖徳太子絵伝の調査研究」（特別調査）は、近年、多くの成果を出している高精細カメラによる撮影画像を、展示の場や第2ウェブサイトの場において有効活用するためのシステム整備を進める予定であり、これにより、作品に関する多くの情報を一般に提供することを目指す新しい取り組みである。
- (2) 「応挙館障壁画の復元に関する調査研究」は外部の特別協力を得て実現したものである。最先端のデジタル技術を活用し精度の高い複製を作成することにより、応挙館の室内空間を復元することが可能となった。また、劣化が懸念されたオリジナル作品の恒久的保存を図ることが可能となった。今後、残りの部分を完成させ、応挙館の一般公開とオリジナル作品の平常展等における活用をはかる予定であるが、文化財の保存と活用に関する新しいあり方を示す事例として評価すべきものと思われる。
- (3) 「日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究」（科学研究費補助金）は、11年度から14年度にかけて実施された同テーマの調査研究（科学研究費補助金）を継承したものであるが、これまでの研究成果を幅広く国民に還元することを目的として、関連作品を一堂に会した特別展「仏像 一木にこめられた祈り」を開催した。博物館における調査研究の一つのあるべき姿を示すものであったといえ、入館者は33万5,489人、カタログの販売数は5万3,302部に及び、新聞等の展覧会関連論評としても多く取り上げられ好評を得ることができた。
- (4) 「文化財の恒久的保存と持続的公開を具現化する博物館トータルケアシステムの構築」は、国際シンポジウムを開催し、今日の博物館における保存分野の進むべき方向を探ることができた。また、その成果を踏まえて、19年1月から、本館17室に「保存と修理」の常設コーナーを新設した。これは、博物館における臨床保存の立場

を分かりやすく説明することにより、文化財保護に対する一般の人々の理解を深めてもらうための新しい試みである。

(5) 「博物館教育・普及事業の事例分析と日本の伝統文化に関する先駆的教育・普及理論の構築」(科学研究費)は、教育分野に関して、科学研究費助成金による初めての研究である。本年度は、海外からの研究者の招聘や九州国立博物館と連携し、開館1周年記念国際シンポジウム「博物館教育の活性化へむけて～アジアの博物館教育の現場から～」の開催に協力するなどの成果を上げることができた。それらを踏まえて19年度に試行的に表慶館において、子どもに中心を据えた教育普及プログラム「緑のライオン」を開催する。

(6) 「博物館環境デザインに関する調査研究」は、本館リニューアルの際のデザインが18年度日本デザイン学会年間作品賞を受賞した実績を基に、「プライスコレクション 若冲と江戸絵画」展、「仏像」展などの特別展や平常展において、展示照明の更なる創意工夫を具体的に示すことができたといえる。

#### **【見直し又は改善を要する点】**

- (1) 高精細デジタル画像撮影や3次元デジタル測定など、新しい科学的手法による調査研究とその成果を具体的に反映した事業が、今後、多く予想される。これらの調査研究や事業を円滑に推進するために必要な当事者間の権利問題をはじめとする法的整備等をさらに進める必要がある。
- (2) 調査研究や事業の展開に資金面を含めた外部の協力を求めることは、ますます重要になると思われる。外部資金を有効に活用するためのシステム整備の検討が必要である。
- (3) 保存科学分野に関しては、国立博物館相互の連携をさらに進めると同時に、文化財研究所との統合による研究成果に関しても、それらがそれぞれの事業に有効に反映されるように、文化財研究所との新たな連携システムを作成し、ナショナルセンターとしての役割が十分に果たせるようにする必要がある。

## (5) 快適な観覧環境の提供

### ① 観覧環境の整備プログラム等の策定

#### ○方針

国民に親しまれる博物館を目指し、入館者の立場に立った観覧環境の整備や利用者の要望を踏まえた管理運営を行う。

施設のバリアフリー化を進め、高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供する。

#### ○実績

##### 1) 点字解説等の作成・配布

当館の案内パンフレットをもとに、B5版21頁の点字パンフレット(冊子)を新たに作成し、必要とされる来館者に配布した。

##### 2) 多国語による案内及び誘導サイン等の整備

作品キャプションについてはすべてに英語訳を付するとともに、英文による作品解説の増加に努めた。

##### 3) より快適な観覧環境の構築のための展示照明等の整備

- ・本館17室「保存・修復コーナー」の新規設置にあたり、間接照明を導入し、展示照明のリニューアルを行うことにより、明るく柔らかい光環境の中で、メリハリの効いた展示照明を整備した。
- ・展示ケース用光ファイバー照明の改良型先端器具を開発し、特別展・平常展における展示照明を改善した。

##### 4) 4カ国語パンフレットの継続作成

引き続き、「本館フロアガイド」「東洋館フロアガイド」(日本語、英語、中国語、韓国語)を作成した。

##### 5) 特別展における音声ガイド等を活用した情報提供と入館者サービスの向上

- ①音声ガイドの貸出を4件の特別展で実施した。(使用料:一律500円 貸出数:計15万7,677台)
- ②年始は1月2日から開館し、4月～12月及び19年3月の特別展期間中の金曜日に夜間開館(開館時間の20時までの延長)を実施した。
- ③3件の特別展において小中学生の観覧料を無料とした。(「プライスコレクション 若冲と江戸絵画展」「仏像 一木にこめられた祈り」「悠久の美 中国国家博物館名品展」)
- ④特別展の共催者ホームページにおける割引券の提供を実施した。(「最澄と天台の国宝」「仏像 一木にこめられた祈り」「悠久の美 中国国家博物館名品展」)

##### 6) その他

###### ①表慶館改修工事の実施

表慶館は、明治41年に竣工し昭和53年に重要文化財に指定されているが、老朽化による雨漏りなどのため修理を実施した。屋根の修理や展示室内部の壁面の塗り替えのほか、建物裏手にスロープを設置するなど1階のバリアフリー化を図り、工事完了後10月24日から一般公開した。

また、資料館の一部のトイレについても改修を行い、来館者の利用を可能にした。



表慶館

- ②AED(自動体外式除細動器:心臓の突然の停止の際に電気ショックを与え心臓の働きを戻すことを試みる医療機器)を本館と平成館に設置した。
- ③4～9月の土曜・日曜・祝日の開館時間を1時間延長した。
- ④庭園を春(18年3月10日～4月15日)及び秋(10月23日～12月2日)に開放した。
- ⑤10月1日の平常展料金改定に伴い、「平常展割引パス」(65～69歳限定)発売(販売数27件)及び「子どもといっしょ割引」(高校生以下の子どもと一緒に来館した場合の平常展割引)(販売数4,613件)を開始した。
- ⑥特別展入場者が特別展会期終了後3週間以内に来館した場合、平常展が半額となる制度を新設した。(「仏像 一木にこめられた祈り」終了後利用者210人「悠久の美 中国国家博物館名品展」終了後利用者140人)

## ○自己点検評価

### 【良かった点、特色ある点】

- ・表慶館の改修と資料館トイレの改修により、表慶館1階のバリアフリー化と来館者の利便向上を図った。
- ・平常展料金改定に伴い、より親しみの持てる博物館となるよう新たな割引制度を設け、サービスの向上に努めた。周知されていないこともあり、現状では利用者数は必ずしも多くないが、今後一層活用されるようPRに努める。

### 【見直し又は改善を要する点】

- ・来館者の要望に応えるため、19年度も引き続き4月～9月の土・日・祝日は18時まで開館を延長するとともに、特別展等の状況に合わせた柔軟な対応に努める。

高齢者、身体障害者等に配慮した設備等（事業実績統計表 174 頁）

音声ガイド実施状況（事業実績統計表 175 頁）

## ② 一般来館者の満足度調査及び専門家の批評聴取

### ○方針

一般入館者を対象に満足度調査を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるほか、必要なサービスの向上に努める。

### ○実績

#### ①特別展アンケート

来館者の感想やニーズを把握するため、特別展においてアンケート調査を実施した。調査結果については当館ホームページにおいても公表した。

（「最澄と天台の国宝」回答数1,038件「プライスコレクション 若冲と江戸絵画展」回答数1,501件「仏像一木にこめられた祈り」回答数1,175件「悠久の美 中国国家博物館名品展」回答数335件「マーオリ 楽園の神々」回答数401件）

#### ②来館者調査

来館者にとっての当館の価値を確認し多様な顧客像への理解を深めるため、来館者調査を実施した。来館者の属性、来館のきっかけ、利用状況と感想、ライフスタイル等に関するアンケート調査を行い、12日間で1,638件の回答を得た。（9月26日～10月8日）

#### ③その他のアンケート

各種のイベント等に際してもアンケートを実施し参加者からの意見聴取に努めたほか、児童・生徒を対象としたアンケートを実施した。

### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

・来館者調査については多数の回答を得ることができ、今後の重要な検討材料となった。

#### 【見直し又は改善を要する点】

・得られた調査結果を十分に分析し、今後の博物館運営と来館者サービスの向上に役立てていきたい。

附属資料 平成18年度特別展アンケート結果（事業実績統計表）

### ③ ミュージアムショップやレストラン等館内環境の充実

#### ○方針

ミュージアムショップの充実やグッズの開発を行うため、関係者との連携を推進する。

#### ○実績

ミュージアムショップを運営する東京国立博物館運営協力会（以下「協力会」という。）と、実務レベルによる「博物館・協力会運営企画会議」を設置し、今後の館と協力会との連携協力の在り方について協議するとともに、「ショップグッズ開発等会議」を設置し、ミュージアムショップの改修、商品の充実について協議・検討を行った。

また、昨年度から検討していた新たな絵はがき作成について、協力会に協力して3年計画で実施することとし、今年度は32種類を作成した。

協力会の「東京国立博物館ミュージアムショップ改装計画」へ、デザイン監修として参加し、次年度7月末のリニューアルオープンを目指している。

#### ○自己点検評価

##### 【良かった点、特色ある点】

実務レベルでの協議の場を新たに設置することで、館と協力会の連携協力が、一層円滑に進められるようになった。

##### 【見直し又は改善を要する点】

ミュージアムショップやレストランの運営者と連携協力を図りながら、より利用者のニーズを適切に反映できるように努めている必要があると思われる。

特にミュージアムショップのグッズの充実は急務であり、「ショップグッズ開発等会議」を中心により魅力あるグッズの開発に努める必要がある。

### 3 我が国における博物館のナショナルセンターとしての機能の強化

#### (1) 調査研究の成果の発信

##### ○方針

日頃の調査研究成果を、出版物、インターネット、講演会、シンポジウム等、各種の様々な手段を通じて、広く一般へ公表ならびに周知を図る。

##### ○実績

- 1) 博物館情報アーカイブス（第2ウェブサイト）の試行版の運用を開始  
研究者紹介ページ、シンポジウム・研究会情報の提供、ミュージアム資料情報構造化モデルの公表
- 2) 国際シンポジウム「博物館における保存学の実践と展望—臨床保存学と21世紀の博物館—」を開催  
開催日：6月2日 場所：東京国立博物館大講堂  
公開研究会「博物館情報学の構築」を開催  
開催日：7月19日 場所：東京国立博物館大講堂
- 3) 東京国立博物館紀要42号を刊行  
神庭信幸「キリシタン絵画の製作技術と材料(I) - 大阪府茨木市において発見された作品 -」  
白井克也「梁山夫婦塚における土器祭祀の復元」を掲載。
- 4) 東京国立博物館図版目録 朝鮮陶磁篇（青磁・粉青・白磁）を刊行  
当館所蔵の朝鮮陶磁作品のうち施釉陶磁器600点ほどの写真と基礎データを掲載
- 5) 特別展図録：展覧会出品作品全点を収載した以下の図録を刊行。  
「プライスコレクション 若冲と江戸絵画」、「仏像 一木にこめられた祈り」「悠久の美 中国国家博物館名品展」、「マーオリ 楽園の神々」「レオナルド・ダ・ヴィンチ—天才の実像」
- 6) 特集陳列図録  
「水滴—動物や野菜をかたどった水入れ」  
特集陳列リーフレット：「文化財の保存と修理」「黒田記念館 黒田清輝の作品」
- 7) 東京国立博物館文化財修理報告Ⅶ  
昨年度修理した作品の修理経過を記述。それぞれ修理前と修理後の写真を掲載
- 8) 法隆寺献納宝物特別調査概報××Ⅶ「聖徳太子絵伝下貼文書2」  
昨年度、下貼文書全点の内容を表に示した。今年度は、そのうち重要文書を取り上げ、釈文を付し、解説した。
- 9) MUSEUM 601～606号  
当館の収蔵品に関する研究論文25編を掲載した。このうち604号は当館所蔵のポール・ルヌアール作の素描、版画の研究論文を特集した。

##### ○自己点検評価

###### 良かった点、特色ある点】

- ・これまでの博物館情報処理の調査研究を発展させ、他の研究機関・企業等との連携に関する成果を公表できた。
- ・研究成果及び事業成果のより幅広い普及に向けて、情報環境の整備を進めることができた。
- ・『MUSEUM』については、当館の収蔵品に関する研究論文25編を掲載した。このうち604号は当館所蔵のポール・ルヌアール作の素描、版画の研究論文を特集した。
- ・特別展「仏像 一木にこめられた祈り」図録では、各作品について複数の魅力ある写真を掲載し、多方向からの写真によって造形の特徴を示した。また、必要最小限の情報を図版の脇に掲載し、初心者にも分かりやすい内容となるよう心掛けた。
- ・「マーオリ 楽園の神々」図録は、ニュージーランドの国立博物館テ・パパ・トンガレワのスタッフとの共同

編集作業の成果で、日本ではこれまでに類書がなく、画期的な出版物となった。

**【見直し又は改善を要する点】**

- ・館内において、研究成果に関する情報をより迅速かつ的確に集約し、効果的に公表していくための仕組み作りが求められる。
- ・刊行物の発行にあたり、制作工程等において、計画通りに進捗を見ない部分があった。殊に外部からの原稿の集約について、改善を図る必要がある。今後は、より計画的な事業の遂行ができるよう、事前調整等を一層綿密に行っていきたい。

学会等発表実績一覧（事業実績統計表 189～190頁）

論文等発表実績一覧（事業実績統計表 193～198頁）

調査研究刊行物一覧（事業実績統計表 203頁）

シンポジウム開催実績一覧（事業実績統計表 205頁）

## (2) 海外研究者の招聘

### ○方針

- ・海外展事業の円滑な進行
- ・日本・東洋の古美術品及び保存科学並びに博物館における展示等についての意見交換
- ・国際交流事業（学術研究及び展覧会事業）について拠点となる提携先の選択
- ・アジアの国々との協力、連携関係の構築ないし強化

### ○実績

ヨーロッパ、アメリカ、中国、韓国、パキスタン、シンガポールより計9名の研究者を招聘し、また、当館研究員延べ14名をヨーロッパ、カナダ、オセアニア、中国、韓国へ派遣して、展覧会事業の推進及び学術交流を行った。また、「アジア国立博物館協会（ANMA）」の設立準備に参加した。

### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

- ・欧米の主要博物館との連携を強化しつつ、当館収蔵品とその活用についての意見交換を効果的に行うことができた。
- ・韓国、中国に加え、アジア各地域の国立博物館との交流を促進することにより、国際交流をより一層活性化していく足がかりとすることができた。

#### 【見直し又は改善を要する点】

- ・限られた経費の中で、効率的で効果的な国際交流をどのように推進していったらよいか、外部機関等との連携も視野に入れ、多角的に検討していく必要がある。
- ・中国、韓国をはじめ、アジア各国から当館との連携を求める声が昨今とみに高まっており、それらに対する具体的な対応を早急に策定していく必要がある。

研究交流実績一覧（事業実績統計表 176～188頁）

#### (4) 収蔵品の貸与

##### ○方針

- 1) 国内の博物館等で開催する展覧会へ収蔵品を約 1,000 件貸与する。
- 2) 長崎歴史文化博物館の平常展示のため約 80 件を長期貸与する。
- 3) 海外の美術館・博物館等で開催する展覧会へ約 250 件を貸与する（海外交流展出品作品を含む）
- 4) 韓国国立中央博物館の平常展示のため 95 件を長期貸与する。
- 5) 国内の公私立博物館と考古資料の相互貸借を実施する。
- 6) 収蔵品貸与拡充の一環として、特別協力を行う。  
富山市佐藤記念美術館開催「東京国立博物館広田不孤斎コレクション 茶の湯の名品」（4月8日～5月21日）
- 7) 東京国立博物館が収蔵する台湾・東南アジア・大洋州の民族資料約2000件を九州国立博物館に管理換し、一層の活用を図る。

##### ○実績

- 1) 国内の博物館等で開催する展覧会へ収蔵品を1,329件貸与した。
- 2) 長崎歴史文化博物館の平常展示のため、80件を長期貸与中である。
- 3) 海外の美術館・博物館等で開催する展覧会（海外交流展を含む）及び平常展示に359件を貸与した。
- 4) 韓国国立中央博物館の平常展示のため95件を長期貸与中である。
- 5) 18年度は四国地区埋蔵文化財センター巡回展実行委員会と協力し、当館の列品28件を松山市考古館で展示する一方、四国四県の近年の出土品133件を当館へ運び、四国地区埋蔵文化財センター巡回展「発掘へんろー 遺跡でめぐる伊豫・土佐・讃岐・阿波ー」と題する特集陳列を開催した。対象地域を一定の地区に限定した結果、双方ともにまとまった内容の展示を行うことができただけでなく、輸送費も抑えることができた。
- 6) 収蔵品貸与拡充の一環として、以下の展覧会に特別協力を行った。  
富山市佐藤記念美術館開催「東京国立博物館広田不孤斎コレクション 茶の湯の名品」（4月8日～5月21日）
- 7) 東京国立博物館が収蔵する民族資料約2,000件を九州国立博物館に管理換するため、両館共同で事前調査（第1回目）を行った。

##### ○自己点検評価

###### 【良かった点、特色ある点】

国内外に多数の収蔵品を貸与し、先方の平常展・特別展を充実させることができた。

考古資料相互貸借事業は、対象地域を一定の地区に限定した結果、双方ともにまとまった内容の展示を行うことができただけでなく、輸送費も抑えることができた。

###### 【見直し又は改善を要する点】

貸与中の作品に破損事故などが起こらないよう、貸与に当たってはより一層慎重に対応する必要がある。

国内の博物館・美術館等への収蔵品貸与件数（事業実績統計表207, 208頁）

海外への列品貸与（事業実績統計表209頁）

考古の相互貸借実績（事業実績統計表210頁）

## (5) 公私立博物館・美術館等に対する援助・助言の推進

### ○方針

全国の公私立博物館・美術館等に対して指導・助言を行い、広く博物館事業の普及に努める。

### ○実績

公私立博物館・美術館等に対する援助・助言	56件
1) 作品の展示・保存環境についての調査・指導	11件
三井記念美術館、リートベルグ美術館（スイス）、アジア文明博物館（シンガポール）、国立新美術館等	
2) 美術館・博物館の展示等に対する指導・助言	12件
富山市佐藤記念美術館、国立歴史民俗博物館等	
3) セミナー、シンポジウム、講演会等における発表・講師での協力	15件
かながわ考古財団、岡山県立博物館等	
4) その他文化財に係る各種の指導・助言	18件
地方公共団体の文化財保護審議委員会や公私立美術館・博物館の主催する会議での委員等としての協力や、文化財の調査等に係る指導・助言を実施	

### ○自己点検評価

#### 【良かった点、特色ある点】

- 1) 国内・海外の博物館・美術館の活動の様々な面にわたり、先方の求めに応じて指導・助言を行った。先方の活動を充実させるとともに、国際交流の発展にも寄与した。
- 2) 所蔵者と当館研究者との間で長年にわたって蓄積された信頼関係が、他機関の展覧会等の実現に貢献する場合が本年度も少なからずあった。例えば、国立歴史民俗博物館の展覧会に出品された巖島神社の作品は、その取扱いを含めて、当館研究員が協力することを条件に出陳が可能になったものといえ、今後とも、所蔵者との信頼関係の向上につとめていきたい。また、寄託品も含めて当館保管の作品の貸与の場合、特に貴重な文化財に関しては、作品の状態を充分把握している当館研究員が陳列及び陳列指導を実施している。

#### 【見直し又は改善を要する点】

- 2) 他機関への指導・助言をさらに充実させるためには、日々の業務において、研究員個々の博物館研究員としての質的向上をはかる必要がある。各分野の専門的業務の次世代への継承が確実におこなわれるように、今後、具体的な方策を検討する必要がある。

公私立博物館・美術館等に対する援助・助言（事業実績統計表 211～214頁）

## II 業務の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

### ○方針

- 1 業務を見直すことにより、不用・重複している業務を廃止するとともに業務の簡素化を推進し、情報の共有化によって事務処理方法を改善。
- 2 エネルギー効率の良い機器への交換によるエネルギーの節約および、より安価な供給契約への変更等による経費の節約。
- 3 ディスプレイ材料の再利用、什器の再利用等の徹底によるリサイクルの推進および経費節減。
- 4 パーティー、コンサート、撮影、映画館への施設利用（平常展入場券付として新たな入館者の開拓も兼ねる）、茶室の貸出等の促進による施設の有効利用。  
国際交流及び日本文化の紹介や入館者の拡大を目的としたコンサート、演劇などを実施し施設の有効利用を図る。
- 5 警備、清掃等に限らず、その他業務においても外部委託への移行促進。
- 6 競争入札を推進することによって、より安価な調達への移行促進。

### ○実績

#### 1 業務の効率化

##### 1) 省エネルギー等(リサイクル) (本部及び東京国立博物館)

電気 (単位：kwh)

14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
7,528,640	8,054,960	8,612,080	8,519,324	8,129,120

前年度比 95.4%

水道 (単位：m<sup>3</sup>)

14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
51,434	52,644	63,143	57,460	54,755

前年度比 95.3%

ガス (単位：m<sup>3</sup>)

14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
858,814	853,180	897,043	897,658	881,282

前年度比 98.2%

・ほぼ全てがボイラー用である。

紙 (単位：kg)

14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
6,155	11,163	10,676	11,581	9,323

前年度比 80.5%

廃棄物(一般) (単位：kg)

14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
114,555	120,570	133,050	133,805	110,240

前年度比 82.4%

廃棄物(産廃) (単位：kg)

14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
27,770	29,360	31,420	34,410	67,940

前年度比 197.4% 文化財研究所との統合に向けて廃棄や改修により増加している。

## 2) 施設の有効利用

施設名	平成18年度	平成17年度
講堂等	392件 (内 有償貸付 73件)	391件 (内 有償貸付 60件)
茶室	205件 (内 有償貸付 67件)	241件 (内 有償貸付 41件)
その他(本館・表慶館・ラウンジ・前庭)	154件 (内 有償貸付 93件)	160件 (内 有償貸付 70件)
合計	771件 収入額 6,836万円	792件 収入額 7,825万円

- ・ 来日している外国人の方々に、日本とその文化を知ってもらう機会を提供するために、日本英語交流連盟との共催により、J E T 東京国立博物館特別鑑賞会を6月7日に開催。講演会「日本美術の魅力」(西田宏子根津美術館副館長)、本館2階の「日本美術の流れ」鑑賞、応挙館でのお茶会等を実施した。(参加者約110名) また、東京国立博物館「留学生の日」を11月11日に開催。博物館紹介、ボランティアによるガイドツアー及び抹茶サービス、東京藝術大学の学生による邦楽コンサートを実施した。(参加者約700名)
- ・ 入館者の拡大を目的とするコンサートとしてハーバード大学男性ア・カペラコーラスグループ「クロコディロス」公演(6月20日 共催:(財)東芝国際交流財団)、「魂を揺さぶるピアニスト エフゲニ・ザラフィアンツ ピアノコンサート」(9月24日 共催:サロン・ド・ソネット)、「ガラテア・クアルテット」(10月14日)、表慶館改修記念展示公開記念「中野振一郎によるゴルトベルグ変奏曲」(12月17日 共催:日本テレマン協会)等を、演劇公演としてク・ナウカ公演「トリスタンとイゾルデ」(7月24日~30日 共催:ク・ナウカシアターカンパニー)、劇団俳優座特別公演「コルチャック」(9月8日~21日 共催:劇団俳優座)を、演芸として「新春東博寄席」(1月7日)を、講演会として「東大寺講演会」(10月19日 共催:東大寺)など様々なイベント34件を実施した。

## 3) 民間委託の推進

清掃、警備、チケット売札、友の会受付、代表電話の電話交換、各種設備保守(防災設備、消防設備、特別高圧受変電設備、空調自動制御機器、中央監視装置の夜間監視、冷凍機設備、ボイラー設備、ビル環境衛生管理、各所自動扉、エレベータ及びエスカレータ、電話交換機設備、自家発電設備、重油用地下タンク設備)を専門業者や台東区シルバー人材センターに外部委託している。その他にも、イベント受付、コンサートなどの会場設営など可能なものはその都度外部委託、学生アルバイトの雇用やイベントボランティア制度を活用し実施している。

また、生涯学習ボランティアへの業務委託として各種の展示・施設案内、茶会などのイベント、無償配付する資料の作成等が実施されており、各種ボランティアによる無償での業務協力は、館の運営上も多大な恩恵を受けているものといえる。

## 4) O A 化の推進

人事システムを導入し本部事務局での人事の一元管理を効率的に行うこととした。

## 5) 一般競争入札の推進

一般競争入札件数17件(契約金額 200万円以上)(前年実績24件)であるが、この件数減少の理由は、いくつかの契約を業務の内容をまとめて一件の契約とする包括的契約を行ったり、上野地区において他機関と共同で数量をまとめて発注するとともに事務を分担したこと並びに、企業等の契約手法を取り入れ、18年度か

ら監視等業務契約を3年の複数年契約とし入札を実施したことによるものである。また引き続き設備保守関係4件の一般競争入札や図書館情報システム、図書データ整理業務、一般競争基準額以下の印刷物の一般競争入札を実施した。

## 6) 業務運営の見直し

本部・東京国立博物館共通で、業務改善プロジェクトチームを組織し、業務運営の見直し及び新たな事業の募集等を行った。プロジェクトチームから提出された案に対し、会議の簡素化等一部の事項は19年4月から実施し、その他の事項については、19年度以降順次検討していくこととなった。

- ① ミッションステートメントの策定
- ② 会議の簡素化、委員会制度の見直し
- ③ 予算配分の見直し
- ④ 組織改編
- ⑤ イベント等渉外事業の効率的な実施
- ⑥ 画像利用制度の見直し
- ⑦ 庭園開放の拡充
- ⑧ ミュージウムカフェの設置
- ⑨ 夜間開館の拡充
- ⑩ 情報セキュリティの向上

## 2 事業評価の実施及び職員の意識改善

### 1) 評議員会、運営会議

評議員会（館の運営に関する重要事項について審議を行うとともに館長に助言することを任務とする）  
2回（5月29日、1月16日）

運営会議（博物館の円滑な運営を図ることを目的として館長以下幹部職員で構成されおよそ月2回程度開催している） 22回

### 2) 研修の実施（実施日 参加者数）

#### ① 東京国立博物館主催の研修の実施

「新任職員研修」（7月6日～7月7日：21人）

#### ② 法人本部が主催する研修への参加

「新任職員研修会」「職員啓発研修会（放送大学授業科目履修）」「メンタルヘルス講習会」「研究職員研修」「接遇研修」

## ○自己点検評価

### 【良かった点、特色ある点】

- 2) コンサート等のイベントを、お客様に展示観覧と併せてコンサート等を楽しんでいただけるよう、開館時間中に実施するものを増やした。（34件中23件を開館時間中に開催）
- 3) 貴重な文化財を管理している施設であることを十分配慮しながら、来館者サービスを中心に業務の見直しを行い、民間委託を推進している。また、一般管理部門においても組織・業務の見直しを行い、民間委託を進めている。
- 5) 競争性の余地がある契約事項については、経費節減の点から可能な限り一般競争入札あるいは指名競争入札を導入するよう積極的に努めている。また、いくつかの業務をまとめて一つの契約とする包括的契約や複数年契約を行い、業務の効率化と経費の削減を図った。

**【見直し又は改善を要する点】**

2) 今年度から、改正消防法が施行されたことにより、イベント使用に制限が出てきたことから、施設の有効活用の手段を考えていく必要がある。